
魔法少女リリカルなのは 転生者による変革

観月 衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者による変革

【Nコード】

N7098W

【作者名】

観月 衛

【あらすじ】

タイトル少し変えました。

ガンダム00好きな主人公がなのはの世界でアンチする話です。

プロローグ（前書き）

思いつきで書きました。

プロローグ

俺は今、見渡す限り白色が続く謎の場所にいる。

「ここはドコだ？」

確かさっきまで家でガンネクをしていたはずなんだが。
おまけに女の人が土下座しているし。

とりあえず俺は女の人に話しかけることにした、が

俺「あの〜」

女「ひいっ!!」

俺「？」

女「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

女の人はずーっと俺に土下座状態のまま謝り続けている。

どうしようか。

とりあえず落ち着かせてみよう。

「あの〜「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」」

だめだこいつ錯乱してやがる……こうなったら

「いかげんにしろ、このアマーーーーッ!!!!」

ドカンッ!!

「痛い!？」

とりあえず殴った。

「落ち着いたか？」

「はい取り乱してすいません。」

「でここ何所？」

「ここは死後の世界です。」

「じゃあ死んだのか俺？」

「はい・・・驚かないですね。」

「まあ死因が気になるけど生きようが死んでいようがどうでもよかったし死ぬ前まで自分の存在意義を考えてたしな。で俺この後どうなるの？」

「今回の件は私のせいなので転生させます。」

「・・・だが断r「拒否権はありません。」なんだと!？」

「転生の際に特典3つと転生先を選べます。どうしますか？」

「・・・じゃあ1つ目ガンダム00の映画版のコロニー型外宇宙航行母艦ソレスタルビーイングとヴェーダをくれ2つ目に俺が考えたガンダムとガンプラで改良して作ったオリジナルのダブルオーを作れるようにヴェーダにダウンロードしてくれ3つ目俺の意識をデータ化してヴェーダにダウンロードしてくれ。」

「体は自分で作るんですね？「そうだ。」じゃあ2つ目に関しては例を見せてくれませんか。」

「こんな感じだ。」

`http://mitemin.net/image
manage/top/icode/31165/`

`http://mitemin.net/image
manage/top/icode/31166/`

「確認しました。では転生する世界を教えてください。（この感じだとSEEDあたりでしょうね。）」

「・・・魔法少女リリカルなのはだ。」

「・・・えっ！？どうしてですか？」

「俺なのはキャラとか設定は好きだけど管理局が嫌いなんだよ。人間ごときがなに神きどってるんだって感じでだからさ管理局つぶそうと思ってるんだ。スカリエッティと。」

「わかりました。では、時代はStrikerSd「いやアリシアが死ぬ5年前だ。」・・・なぜですか？」

「戦力の増強（他の理由もあるけどな。）」

「わかりましたでは転生場所はミッドの軌道上でいいですか？「ああ。」

では、転生させます第2の人生を楽しんでください。」

プロローグ（後書き）

すいません画像の張り方わからないんで本文中にあるURLにアクセスして見てくださいホントすいません。

後ガンダムの名前が思いつかないんでアイディア募集します。

ネーミングセンスないんで（へーへ；）

1話（前書き）

ガンダムの名前はまだ決まってません決まり次第発表します。
後短いです。

1話

どうもリボンズ・アルマークです転生して4年がたちました。

この4年間色々準備をしてきました。

まず始めに肉体を作りました。察するとおり、リボンズの体です。
いやゝアムロボイスになったときはマジ感激でしたよ！！

その後一人じゃ寂しいのでとりあえず、リジェネ、ヒリング、リヴ
アイヴ、を作りました。

ちなみにみんな僕の考えに賛同してくれましたみんな僕の正体を
知っています。・・・ってかヴェーダにリンクしてる時点でわかる
しね。そして今は、ガンダムやガデッサやガラッゾ、ガテラーザな
どの制作をしながら今後について話しています。

「とりあえずどうやってスカリエッティと接触するかよね」

「そうですね。まずそれを考えないと話が進みませんしね。」

「まっヴェーダ使えば一発なんだけどね。」

「それじゃつまらないだろリジエネ。」

「まあね、でどうするだい？リボンズ。」

「それについてはもう考えてるよ腐った脳みそ共を利用しようと思うんだ。」

「腐った脳みそって管理局の最高評議会のことですか？」

「そうだよ。彼らは不死で強靱な肉体を望んでいる。そこに僕たちイノベイドのデータ持って行けば・・・」

「喜んで餌に食いつく。」

「そうさ。その上交渉次第でいい資金援助をしてくれるだろうさ。」

「へーさすが考えることが本物のリボンズ並にエゲツないわね」

「ほめても何も出ないよヒリング。」

「リボンズ質問なんですが。」

「何だいリヴァイヴ？」

「なぜこの時代に転生したんですか？ASの後の方が効率的にいい気がするんですが？」

「ああそれはね。もうすぐ新型魔導炉の実験があるのは、ヴェーダの情報で知ってるよね？」

「はい」「ええ」「ああ」

「その時アリシアが死ぬだろ。」

「ええヴェーダの中にあったアニメ見せてもらいましたから・・・
つまさか!？」

「そのまさかだよ。ぼくは、テストロッサ家をこちら側につけよう
と考えてる。もちろんイノベイドに改造してね」

「そのためにちよくちよく出かけてたんですね。アリシア・テスト
ロッサの意識データと遺伝子を手に入れるために。」

「あたしてつきり遊びに行ってるかと思ってた。」

「・・・それはどうゆう意味だい？ヒリング。」

「だって毎回違うお見上げ買ってきてたからてつきり遊びにいつて
るかと思って。」

「・・・まあいいそうゆう理由さ。だからみんな今後に備えて準備
を怠らないでくれ。」

「「「わかりました（ったよ）（ったわ）。」「」」

1話（後書き）

StrikerSまでどんな感じするかは決めましたがStrikerSからどうしようかまだ考えてません六課にアニューをスパイとして送り込もうなど色々考えてますがまだ決まりません。しかも肝心のガンダム書いたり作ったりして置きながら名前考えて無いかこんな優柔不断な作者ですいません。

2話（前書き）

最近思うんです・・・高町なのはⅡストフリもしくはヴァーチェッ
てイメージが強いようですが、作者的には、なのはの砲撃とブラス
タービットでしつくりくるのがリボガンなんです。なのはさんは、
ストフリほど近距離戦よくやらないしヴァーチェほど遅くないです。
ですから作者的にリボガンがびったりじゃないかと思うんです。リ
ボガンは、接近された時ぐらいいしかビームサーベル使わなかったし
トランザム使わないとフィンファング使えないし・・・どう思いま
す？

そんなどうでもいい話は、終わりにしてオリジナルガンダムの名前
ですが取りあえず仮を出します。ガンプラのダブルオーはクアンタ
ムザンライザー絵の方は、ガンダムルシフェルにしました。・・・
ホントすいません。

2話

魔導炉の暴走から1年がたちました。プレシアさんは、今必死にプロジェクトFを進めています。律儀ですね。

イノベイドサイドでは、クアンタムザンライザーが1機、ガラムガンダム1機、ガデッサ1機、ガラッゾ1機、がロールアウトしました。

ガンダムルシフェルは、ストライカーズで出そうと思うのでまだ開発していません。

ガテラーザは、まだ開発中です。材質のEカーボンの入手に手間取ってます。

そして今僕は、時の庭園でプレシアさんに魔導炉の暴走が管理局に仕組まれていたことなどの説明をしています。

えっ？ 出会いとかどうしたかって？ 細かいことは気にしないでください。

「とりあえず魔導炉を暴走させた理由は、こんな感じさ。そして管理局……いや、評議会にとって嬉しい誤算がでたのさ。」

「それが……」

「そうさ、アリシア・テストロッサの死さ。その時まだ理論としてしか確立していなかったプロジェクトFの情報を絶望していた君に与えることで、プロジェクトの完成を急がせたのさ。」

「じゃあ私のアリシアは、戻ってはこないと言うの!!」

うお!?(^|~^;)こえゝアニメでもアリシアのことになるとすごく怖い状態だったけどリアルは、もっとこえゝ(泣)

「そうだね。コピーは、所詮コピー本物になり替わることはできない。」

「そこで取引W「取引・・・アリシアが戻ってこないと言うのに、私に何の利益があるというの!」少し落ち着いたらどうだい?」

「僕が話したのは、プロジェクトFでは不可能と言う話だ。」

「!?!それ以外に方法があるとと言うの!!」

「だから少し落ち着きなよ。プロジェクトFは記憶を上書きすることとはできても対象の意識や人格までは、定着させることはできない。その時点で同じ記憶持った別の個体となってしまう・・・しかしデータ化した対象の人格を植え付ければ話は別さ。」

「・・・」

「僕は、その技術もアリシア・テストロッサの人格のデータもある。その上で聞くよプレシア・テストロッサ、僕との取引にのるか?」

「それで私のアリシアが戻ってくるのなら、貴方との取引のるわ。」

「取引成立だね。この取引での僕の要望は2つ、1つは、僕の計画に協力してもらう。2つ目は、君には僕の指示のもとでプロジェクト

トFの研究を続けてもらう。」

「貴方の計画に協力するのは、いいとしてなぜプロジェクトFを続けなければならないの？」

「理由は2つあるけど1つは、まだ言えない。もう1つは、突然研究を止めたら評議会が怪しむだろ。」

「なるほど…わかったわ。」

「じゃあ話は終わりだ後日アリシアを甦らせて連れてくるよ。僕との連絡はその端末でできるから僕は、これで失礼するよ。」

僕は、ソレスタルビーイングでお馴染みの端末をプレスシアに渡すと研究室の出口に向かった。

「はあくゝリボンスの口調疲れるな。」

そのころリジェネ達は・・・

「ああ！？もうリヴァイヴちゃんと援護してよ！！」

「そう言うヒリングこそちゃんと攻撃してください！！あつまたとされて。」

「もう戦力ゲージ2000しかない！！どうすんよ！？」

「リボنزの言った通りこのストライクフリーダムミーティア装備ってふざけた位チートだね。」

ガンネクを元に作ったシュミレータの
ネクストファイナルをやっていた。

2話（後書き）

次回は、主人公設定にする予定です。

ナレーションと会話がおかしなくらい変なのは、主人公が、がんばってリボنزのように振る舞おうとした結果です。

主人公設定&機体設定（前書き）

タイトル通りです。

主人公の性格少し変えました。

主人公設定&機体設定

主人公

名前 リボنز・アルマーク

性別 男

性格 表向きはリボنزそのもの

本性はメンドくさがりやでめっちゃドSと自分で言い張っているが本当は面倒見がよくとても優しい

体格 00のリボنزと同じ

オリジナルガンダム

機体名 クアンタムザンライザー

全長 20.6メートル

重量 82.4t

武装 GNソードライフル?×2

GNビームサーベル×2

GNショートダガー×2

GNバスターブレイド×2

GNミサイル×6

GNキャノン×2

動力 オリジナルのGNドライブ×2

<http://mitemin.net/image/manager/top/icode/31166/>

機体名 ガンダムルシフェル

全長 22.4メートル

重量 79.2t

武装 GNバスターライフル×2

大型GNビームサーベル×2

GNフィンファング×8

小型GNフィンファング×4

大型GNフィンファング×8

GNキャノン×2

動力 オリジナルのGNドライブ×2

<http://miten.net/image/manager/top/code/31165/>

参考設定

イノベイドの機体は、全てオリジナルの太陽炉を使用

量産機またガテラーザなどのMAは、疑似GNドライブ改を使用

主人公設定&機体設定（後書き）

まあこんな感じです。

3話

プレシアとの交渉から5年が経ちました。

アリシアは成人では無く死んだ時の年齢の肉体を作るので2カ月程で蘇りました。

1週間ほどプレシアさんに様子見して貰いましたが特に問題はありませんでした。

むしろ完璧すぎてプレシアさんが色々暴走して大変でした（へーへ；
）

フェイトは、一年半ほどで誕生しました。

もちろんプレシアにイノベイドのデータを渡してフェイトをイノベイド化することに成功しました。

途中プレシアさんの病気の症状が出てきたのでルイスに渡していた薬と同じ物を与えてプレシアさんもイノベイド化しました。

・・・えっ？何でイノベイドにしたかって？

治療は、するつもりでしたけどアリシアが泣きながら「ママを治し

て。私と同じイノベイドにして！」って言うてくるんですよ！

泣き顔見た上に上目使いで頼んでくるんですよ！断れないでしょ！

ちなみにアリシアは僕らが作ったんで最初からイノベイドです。

もちろんフェイトもアリシアもイノベイドだと自覚しています。

今では、僕たちもアリシアやフェイトと仲良くなってよく相手をしてあげたりしています。

えっアルフとリニスはどうしたかって？もちろん二人とも使い魔になりましたけど。

アルフは、フェイトやアリシアと遊んだりしたりフェイトと魔法の勉強をしたりしています。

リニスは、プレシアと共に今僕が開発を試みようとしている人間サイズのモビルスーツ（無人機）の手伝いをしてもらったりフェイトとアリシアの教育係をしてもらっています。

そして僕たちイノベイドは、現在……

「わーいまたヒリングお姉ちゃんに勝った！」

「また負けた。」 O T L

P S P のガンネクをしています。

「おお姉ちゃん元気出して！最後のアリシアへの追い上げもすごかったんだから！！」

フェイトがヒリング励ます。

「シュミレーターの方は強くなったのになんでP S Pになると弱くなるんですか？」

「確かにヒリングは、普通のゲーム弱いね。」

「うん弱い。」

「・・・」OTL

「大丈夫だよ！私だって上手くないんだからお姉ちゃんも一緒にがんばろ。」

「うゝフェイトだけがあたしの味方だよ。」

「悔しいならシュミレーターの方で憂さ腹しでもしてきたらどうですか？」

「そうしたいんだけどこの前リボンズが「みんなそろそろ慣れてきただろうから、設定を変えたり使える機体を増やしたりボスを強力にしたりしようと思うからしばらくシュミレーター使わないでね。」だって。」

「あれ以上何をする気だろう？」

「知らないわよ。でもストフリーミアは出ないでほしいわね。」

「それは、同感ですね。」

「みんな集まってるかい？」

「あっリボンズ！ママ！」

「お疲れ様リボンズ、母さん。」

「ただいまアリシア、フェイトいい子にしてた？」

「うん。」「はい、母さん。」

「どうだい？人間サイズのMSの開発は。」

「なかなかうまくいかないよ。デバイスを応用して無人機用のA
Iは開発できたけどGNドライブの小型化がうまくいかないんだよ。」

「そうなのよ。で今悩んでるの。一回り小さいサイズまでなら何と
かなるんだけど。」

「これ以上小さくするためにも早くスカリエティと合流しないと
けませんね。」

リニスがそう言うとりボonzは、少し考え込み

「・・・予定より早い気がするが僕は、評議会とコンタクトを取る
ために1ヶ月ほど出かける。」

「ずいぶん急ですね・・・僕らは、どうしますか？」

「予定どうりの行動をしてくれ。」

「例のジュエルシードの回収及び書類上でのプレシア・テストロッ
サの死の演出ですね。」

「死の演出は問題ないけど、ジュエルシードの回収の真意はなんだ
い？」

「あのジュエルシードの構造を解析すれば粒子圧縮率を格段に上げ
られることができると思ってね。」

3話（後書き）

新しいシュミレーターはエクストリームVSにする予定です

4話（前書き）

今回は最高評議会との交渉話です。それなりにシリアスです。

4話

ここはミッド地上本部の地下深く

？「……プロジェクトFの成果が未だに出ていないな……」

？「プロジェクトFの研究所を増やす必要があるな……」

？「そんな事より今はスカリエッティに研究させている戦闘機人だ」

？「そう、あの力は凄まじい……我らの“新たな身体”には持つてこいではないか」

？「しかしあの戦闘機人の体はプロジェクトFのように記憶転写が
できん」

？「忌々しい！」

我々は暗い部屋でどうすれば新たな身体を手に入れられるか話し合
う。

？「随分とお困りのようですね？」

？「な、何奴！？」

突然の第三者の声に、我らがそこを見ると……緑色の髪の男がいた。

リボンズ「初めまして…僕の名前はリボンズ・アルマーク。あなた方に僕と友好的になっていただこうと思い、失礼ながらも参上いたしました」

？「ほお……その話を詳しく聞かせてもらおうか？」

？「いいのか？こんな得体の知れない奴の話なんて…」

リボンズ「そう言われるかと思い、僕なりの手土産を持ってきました」

リボンズがそう言うと同時に自分の持っていた端末を操作する。そしてモニターに映ったのはリボンズの持ってきた。イノベイドのデータだった。

？「なんだね、それは？」

リボンズ「このデータは、プロジェクトFを元に僕が考えた新たな人間の研究です。」

？「ほお……内容は？」

リボンズ「こちらを見て戴ければ分かります」

リボンズはイノベイドの身体構造などの説明をした。

？「常人の2倍に等しい寿命と老化抑制のされた体か…なかなかだな」

リボンズ「しかも記憶と意識をデータ化し端末に保存すればこの体

は器となり半永久的な体を手に入れます。」

？「おお！凄いな！」

リボنز「このデータは、僕とあなた方との友好の為に譲渡しよう
と思います」

？「リボنز、君はなかなか見所があるな」

？「このイノベイドを使えば人員不足も補えるな」

リボنز「それともう一つ提案があります。」

？「…なんだ？」

リボنز「失礼な物言いになりますが…貴方がたが研究させている
違法研究の情報がうまく統制できていないのでは？」

？「…確かに最近情報漏れが頻繁におきているが…」

リボنز「私は量子演算型処理システムを所持しています。ですの
で、もしもの時に際してお三方の情報統制のお手伝いできれば……
と思ひまして」

？「確かにそれがあれば情報漏れはまずないな。その上で貴様是我
らの信頼を得るためにイノベイドのデータを持って来た訳か」

リボنز「その通りです。それで…どうされますか？」

？「私はリボنزの協力に賛成する」

？「私も賛成だ」

？「ふむ、決まりだな。リボنز、我々は君に投資をしよう」

リボنز「ありがとうございます。その上でお願いがあります。」

？「ウム、なんだ？」

リボنز「ジェイル・スカリエティと連絡を取らせていただきたいのです。イノベイド完成のためには彼の技術が必要不可欠なのです。それとイノベイドの戦闘データを取るために管理局内での僕の地位と独立部隊の設立の許可をいただけますか。」

嘘だイノベイドの技術はもう完成している。ことを始めるためまでの時間稼ぎのためリボنزは、うそを言った。

？「なるほど：ではスカリエティとの連絡方法を教えよう。地位の方は少将の地位を与えよう。」

リボنز「ありがとうございます。量子演算型処理システムのターミナルユニットが出来上がり次第お持ちします。あなた方の体と意識をデータ化する手段を開発次第ターミナルユニットと同様お持ちします。」

？「ウム、ご苦労…」

リボنز「では、今日はこれにて失礼…」

リボنزはまた暗闇へと姿を消した。

？「ようやく叶うな……不老不死の体が」

？「ウム…しかし、あのリボンスとやら、信用出来ると思うか？」

？「不審な行動をすれば消してしまえばいい」

？「それもそうか…」

？「そう、全ては…」

？「「我ら、時空管理局の為に」」

リボンス side

リボンス「さて、これで仕込みの半分は終わった」

暗い通路を歩きながら、これからの事を考える。しかし、後の半分はまだ先のストライカーズからのことだから今は、特にやることはない。

計画は順調だ。

リボンス「唯一の不安要素は僕の介入で物語がどのような変革をするかだな……だが手は幾らでもある。……ちょうどいい機会だな。アレ（・・・）の開発も始めるか……ふふふ…管理局には僕の手のひ

らで踊ってもらおうでしょうか…」

無様に踊り、そして思い知るがいい。人間ごときが神を気取ると言うことが、どれだけあさましいかと言うことを！！

4話（後書き）

次回は、なのはの本編を書こうかと思っています。

5話（前書き）

無印の本編は、なのは&フェイトの最終バトルから入ります。・・・色々飛ばしてすいません。

因みにまだガンダムの名前が決まりません。

候補は出ているんですが、名前はまだ募集中なので良いのがあったら教えてください。

5話

リボンズ sided

どうもリボンズです。脳みそ共との交渉後スカリエティと連絡を取り、会う約束をしました。

ヴェーダのターミナルユニットはスカリエティとの連絡後すぐに送りました。

脳みそ共は早速使い始めているようです。

その時僕は、最高評議会の連中って馬鹿じゃないかって思いましたよ！まあそうなるようにうまく話を進めたんですけどね。（笑）

そう交渉時最高評議会の連中は不老不死の体が入ると舞い上がっていてリボンズの策略に気づかずまんまとハマってしまったのだ。

ヴェーダはリボンズ達イノベイドの支柱にある。よって評議会の連

中はいくら情報統制ができようともヴェーダの制御は全くできず情報は、表裏関係なく全てリボンス達イノベイドに送られる。

更にターミナルユニットを直接管理局内に置くことで管理局にハッキングまたは、全システムをいつでも乗っ取れる状態を作り出したのである。もちろん管理局本局も例外ではない。

そして現在僕は、ヒリング、リジエネ、アリシア、リニスと共にソレスタルビーイング内でフェイトとなのは最終決戦をしています。

「へーあのなのはって子以外とやるじゃない」

モニターを見ながらヒリングが言う。

「確かにあの空間認識力は、すごいね。刹那・F・セイエイと同様に純粹種の素質を持っているんじゃないのかな？」

「その可能性はあるね。現に彼女には脳量子波の兆候があるみたいだ。」

「せつな？じゅんすいしゅ？」

「アリシア少しはヴェーダにリンクして勉強してください。」

リニスが呆れたようにアリシアに言った。

「だって私リボンズみたいに頭良くないもん。ねえリボンズせつな
って誰？純粹種ってなに？」

「刹那は、人類で初めて純粹種のイノベイターとなった存在だよ。」

「ふーんじゃあ純粹種ってのは？イノベイターってのは？私たちイ
ノベイドと何が違うの？」

「イノベイターは僕たちと同じような存在で純粹種ってのは自らの
力で僕たちと同じ存在になった者のことだよ。」

「そうなんだーじゃあ、あの子も、もしかしたら仲間になるの？」

「可能性は低く無いね、でも彼女の場合真実を知らない内は、こち
らの敵になり続けるだろうね。」

「知ったとしてもどう行動するかわからないしね。」

「なくんだ。つまんないの折角友達になれると思ったのに。」

「残念だけど何か問題が起きない限り僕らは、介入できないよ。」

「ぶーうぶーう>(´・`・´)<」

「だだをこねてもだめだよ・・・ところでアリシア何時まで僕に寄りかかっているんだい？」

今アリシアは、リボنزの膝に寄りかかって座っている状態だ。

「だめ？」

「別にいいけど」「じゃあこのまま。リボنزに会えなかったから少しでも長く一緒にいたいんだ。」・・・・・・・・・・」

ホントにいつフラグ立てたんだろう僕

「ところでリヴァイヴの方の準備は？」

「既にガッデサで時の庭園に問題なく計画は進行中だよ。」

「あっ！！フェイトが決め技使うみたいだよ。」

僕は再びモニターに目を向けた。

なのはSide

やっと私の出番なの!!!でもよりにもよってなんでここからの出番なの?

ちよっと最後の後書きで作者さんとO☆H A☆N A☆S H Iしなきゃなの!!!

ピンポーン（作者に死亡フラグが立ちました。）

作者「僕は無実だあああああああああ!!!!!!」

ん?なんか変な電波が聞こえたの。

そんなことより今フェイトちゃんの大技が終って今フェイトちゃんはずごく息切れをしてるの。

フェイト「はあはあはあはあはあ……。」

ここから私の反撃なの!!

「撃ち終わるとバインドって言うのも解けちゃうんだね」

「今度はこっちの……」

『D i v i n e』

「番だよ!」

『B u s t e r』

フェイトちゃんがバリアーで何とか耐えてるの。
でもこれで終わったと思ったら大間違いなの!

『s t a r l i g h t b r e a k e r』

「使いきれずにばら撒いちゃった魔力を、もう一度自分のところに集める。」

フェイト「収束砲撃……」

「私とレイジングハートで考えた知恵と戦術、最後の切り札!」

フェイト「くっ!……うおおおおおおお!!!!」

そしてフェイトちゃんは、私のスターライトブレイカーの光に飲み込まれたの

5話（後書き）

取りあえず本編を少し書きました。

最後のところだけですいません。

後本編書くとか言って短くなってすいません

ガン！ガン！

時の庭園のところも書こうと思ったんですが、友達が「ここは、じらした方がいい」と言ったのもありますがリボنزの計画も書きたかったので今回はここまでにしました。

ガン！ガン！ガン！ガン！

と言うことで次回はリボنزの計画も含めた無印の最後を書こうと思います
。

次回は少し書くのに時間が掛かるかもしれませんがまた次回にお会いしましょう。・・・ところでさっきからするこの音は何なんでしょうか？

ドカーン！！

なっ なっ なんだ？？？

な「見つけたの！！作者さん！！」

げえ！？　どうしてここに！？　あの厚み60センチの鋼鉄製の扉を破った、とでも言うのか！？

な「あんな扉スターライトブレーカーで一発なの！」

やはり貴女は魔お「作者さん？」何デモアリマセン！！

な「それで? . . . 何でなののは出番があんなどころからなのかな?」

いや……その……（―――）；）それがこの小説の仕様でして……あの……その……の……

「……少し……頭：冷やそうか？」

a a a a a a a a
a a a a a a a a
a a a a a a a a
ちよ!なのはさん!それまだ时期的にはYGYaaaaaa

な「では、みなさん次回もお楽しみに」

リボンス「……その後作者がどうなったのか知る者は、誰もいな
い……」

6話（前書き）

いよいよ無印のラストです。長くなりそうだったのでなん部かに分けて投稿しようと思います

6話

リボنزSide

リボنزは今自分の部屋にいる。

予定道理フェイトは、管理局に捕まった。

これでは原作道理にジュエルシードを発動させてプレシアが執務管の前で虚数空間に落ちれば今回の計画は終了だ。

今回の計画の目的は3つある。

1つは、執務管の前で虚数空間に落ち事実上プレシアが死んだをことにし、こちらへの完全なサポート体制に入って貰うこと。

これでジェルシードも手に入る上にフェイトも罪は無くなる。

そして2つ目は、こちら側への管理局の足取りを消すのが目的だ。

幾らヴェーダで情報統制しようとも、人の疑う心までは消すことはできない。

ゼスト隊がいい例だ。

ゆえに僕は、その不安要素を消すためにこの計画を思いついた。

そのためにプレシアの救出にリヴァイヴをガッデサで送り込んだ。

3つ目は、フェイトになのは側についてもらい動向を探ってもらったためだ。

それに・・・・・・・・・・

幾ら原作道理に進めても僕というイレギュラーがいる限りこの物語りは歪む。

それに対応するためにフェイトを送り込んだ上にアレ（・・・）の開発も始めている。アレはASが始まる頃には、完成する。

これでは、スカリエティをこちら側に引き入れればAS終了までのまでの仕込みは終わる。

「…ふふふ…怖いほどうまくいってるな・・・しかし油断はできない。」

本物のリボンズは、人間を侮りすぎて負けた。

・・・僕は、リボンズ本人と同様に人間は、愚かだと思っている。

けど刹那のように、人には無限の可能性があると信じている。

イオリアやアムロのように全人類と言うほどでは無いが・・・

だからこそ僕は、神にでもなったように振る舞う人間…いや時空管理局が嫌いだ。

「計画はまだ始まったばかりだ。だが一度の失敗も許されない・・・それでも僕は成功させる・・・僕が管理局に破壊と再生をもたらすんだ。」

「・・・そう、たとえ一人になったとしても。」

「リボンスそろそろ管理局がプレシアのところに着くようだよ。」

「…わかった。今行く。」

そう言うと僕は部屋を出た。

私は、捕まり、手錠はめられアースラに連れてこられた。

なのはに手をつかまれ、後ろにアルフ、ユーノがいる。

映像では武装局員たちが母さんを捕まえようとしている。

局員『プレシア・テストロッサ。時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します。』

プレシアは椅子に座っている。

局員の何人かが奥の部屋へと入った。

アリシアの眠る部屋へ。

その時、プレシアの目の色が変わった。

そしてそこはクローンで作ったアリシアそっくりに作った肉体があった。

ポットに入れられて…。

局員『これは!?!』

プレシア『私のアリシアに近寄らないで!』

局員『うああー!!!』

プレシアが局員を吹き飛ばす。

そして残りの局員も雷によって全滅した。

フェイト「アリシア…。」

プレシア『フェイト、よくやったわ。おかげでジュエルシード9個そろったわ。これでたどり着けると思うわ。だけど、もう終わりにするわ。』

この子を亡くしてから時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするの…。」

フェイト「っ!?!」

プレシア『聞いていて。あなとのことよ、フェイト。せっかくアリシアの記憶を上げたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない私のお人形…。』
いえ、ジュエルシードすべて集めたから少しは使えたわね。』

エイミイ「・・・最初の事故の時にね…プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの。その後プレシアが行っていた研究は、使い魔を超える人工生命体と…死者蘇生の技術」

クロノ「記憶転写特殊クローン型技術、…プロジェクト・フェイト。

」

プレシア『そうよ、その通り。でも失ったものの代わりにはならなかった…。作り物の生命は所詮作り物…。』

アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ…。アリシアはわがままも言ったけど、私のいうことをとてもよく聞いてくれた…。アリシアは私にいつでも私に優しくかった…。

あなたは私の娘じゃない…。ただの失敗作。あなたはもういないわ。どこえなりと消えなさい！！

いいことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね…大嫌いだったのよ！』

フェイト「っ!?!」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
母さん

演技上手すぎるよ！
(^ _ ^ ;)

あっ！私も死んだような目作んなきゃ！

エイミィ「ちょ、大変！見てください！屋敷内に魔力反応多数！」

アレックス「魔力反応、いずれもAクラス！」

ランディ「総数60：80：まだ増えます！」

リンディ「プレシア・テストロッサ！いったい何をするつもり？」

プレシア『私達は…旅立つの…。永遠の都アルハザードへ！この力で旅立って取り戻すのよ…すべてを…！』

ランディ「次元震です！中規模以上！」

リンディ「振動防御！」

アレックス「ジュエルシード9個発動！次元震さらに強くなります！」

ランディ「中規模次元震さらに拡大！このままでは次元断層が！」

リンディ「転送可能の距離を維持したまま、影響の薄い場所まで移

動！」

アレックス「了解です。」

リボنزSide

「・・・・・・・・・・」

「これは…なんとも」

「これ本気で言ってるんじゃないの？」

「そんなはずは・・・無いと信じたいですね。」

幾ら原作道理に演技してと言ったもののここまでリアルに再現できるとは思ってたなみかった。

「ママすごい!!これなら主演女優賞も夢じゃないね!」

「」「ひっ否定できない。」「」

「.....」

先ほどのことを考えているリボンは何も言わない。

「...リヴァイヴ準備は?」

《既にできていますよ》

「そうか・・・頼んだよ。」

《・・・わかりました。》

「リボنز？」

「ん、なんだいアリシア」

「∴私たちみんなリボنزの味方だよ。」

「!?!? ∴そうか・・・同類だからわかつちやうか・・・」

「うんだから∴安心して大丈夫だよ。」

「
・
・
・
ありがとう。
」

6話（後書き）

今回はリボنزの思っていることや考えていること、そして時の庭園の頭を書きました。

リボنزがキャラ崩壊してしまいました。すいません。

書いていて暗くなっていく自分がいました。（笑）

次回に続きます。

7話（前書き）

前回の続きです。

フェイト視点で迷いが晴れた後から始まります。

7話

フェイトSide

私は時の庭園に向かった。

そこには、なのはとユーノ、遅れてきたアルフとが多数の傀儡兵と戦い、苦戦している。クロノはプレシアの逮捕、リンディは次元震を止めるため先に行っている。

アルフ

「くそ！数ばかりごちゃごちゃと！」

なのは

「それだけならいいんだけど…！」

ユーノ

「くっ…うっ！なのは…！」

その時、ユーノが押さえつけていた傀儡兵達の一体が無理やりバインドを解き、傀儡兵の持つ斧がなのはに振り下ろされた。

なのは

「っ!？」

なのはは避けきれなかったのだが

バルディッシュ

>Thunder Rage<

びしゃーん!!!

斧がなのはに当たることはなかった。雷が傀儡兵に落ち、傀儡兵達は斧を振り下ろしきれなかったのだ。

なのは

「え？」

フェイト

「サンダー…レイジッ！」

どおおおん!!

なのはに斧を振り下ろした傀儡兵はもちろん、その周辺の傀儡兵も

破壊された。

アルフ

「フェイト!?!」

私はなのはの傍に近寄る。

しばらく私となのはは見つめあう。

なのはは何か言いかけるが、壁が壊され、今までの何倍もでかい傀儡兵が現れそこらじやない。

フェイト

「大型だ…。防御が固い。」

なのは

「うん…!」

大型傀儡兵は砲撃を放とうとする。ボーっとしている場合じゃないな。

フェイト

「でも二人でなら…！」

私がそう言うと、なのはは私に振り返り

なのは

「!?…うん…うんうん!!」

フェイト

「いくよ…バルディッシュ！」

バルディッシュ

>get set<

なのは

「こっちもだよ、レイジングハート！」

レイジングハート

>stand by ready<

それぞれ、デバイスを変形させる。

フェイト

「サンダースマッシュャー！」

なのは

「デイベイーンバスター！」

フェイト、なのは

「「せーのっ！！」」

二人で声をかけあい、一斉に砲撃の威力上げ

バアアアアアアアン

大型傀儡兵は破壊された。勢い余って壁まで貫通していった。

なのは

「フェイトちゃん…。」

フェイト

「・・・行こう。」

なのは

「あっ…うん！」

リヴァイヴSide

「…さて、そろそろ時間ですかね？」

僕は今虚数空間内でガデッサを飛ばしている。プレシアとジュエルシードが落ちてきたら拾うのが今回の役割だが・・・

「このまま終わらすのは、なんかつまらないな・・・」

フェイトSide

時の庭園 最深部 プレシアの居る場所

やっとここまで来た。

ここにはクロノ、リンディ、私、アルフ、プレシア、そしてポットに入ったアリシアがいる。

プレシア

「ぐふっ！ゴホッゴホッゴホッゴホッ」

プレシアは血を吐いている。

フェイト

「母さん…。」

母さんは血を吐いている。もちろん血糊だ。

プレシア

「何を…しにきたの…？消えなさい、あなたにはもう用はないわ。」

フェイト

「貴方に言いたいことが有って来ました。私は…ただの失敗作で偽物なのかもしれません。でも母さんに笑ってほしい、幸せになってほしいという気持ちだけは本物です。」

私は母さんに近寄る。

プレシア

「来ないで、偽物！」

私は、歩みを止める。距離はだいたい2〜3mくらい。

（――；）うゝ母さんそのセリフ私に結構ダメージあるよ…

プレシア

「くだらないわ…。」

その時、プレシアは魔法陣を敷きだした。ジュエルシードが発動する。庭園が揺れ始めた。

プレシア

「私は行くわ…アリシアと一緒に…。」

プレシアの足場も壊れ始めた。その隣にはアリシアもいる。

フェイト

「母さん！アリシア！」

私は手を伸ばすが、その手は届かなかった…。

時の庭園は崩壊。プレシアは虚数空間に落ちていった…。アリシアと共に……。

フェイト

「くっ…。【リヴァイヴ今だよ。】」

リヴァイヴ【わかっているよ。】

この後、全員無事に脱出した。

そして、私とアルフはアースラで部屋に隔離された。

リヴァイヴSide

リヴァイヴ

「プレシア大丈夫ですか？」

プレシアは今ガデッサの手の平の上にいる。

プレシア

「ええ問題ないわ。」

リヴァイヴ

「ジュエルシードは？」

プレシア

「ここに」

プレシアはデバイスを指した。どうやら落ちてる最中に回収したようだ。

リヴァイヴ

「では戻りますか。しっかり捕まってください。」

プレシア

「わかったわ。」

そして僕はGN粒子を最大放出しながらこの宙域から離脱した。

7話（後書き）

次回はリボズ達のこれまでの成果や今後について書こうと思っています。

アンケート実施のお知らせ（終了しました）

突然なんですがアンケートを取ります。

このアンケートは今後のこの作品に大きく関わってくるのでできるだけお答えしてください。

アンケート1

リーンフォースを生存させるか否か

これはこのままだとなのは側の戦力が偏りすぎるためその対応としてリーンを生存させるべきか否かです。

アンケート2

なのはが墜ちる際の墜ち方

これは、三択でお願いします。

1 原作道理ガジェット4型で胸を貫く

2 疑似GN粒子のGNスナイパーライフルで胸を打ち抜く

3 GNクロードで胸を貫く

この3つからでお願いします。ほかにいいアイディアがある人はそれを書いてもらっても構いません。

アンケート3

地上本部で活動するイノベイドの部隊に誰を4人入れるか。

これのアンケートは、イノベイドの名前を書くのでそれから4人選んでください。

1 リジェネ・レジェッタ

2 リヴァイヴ・リバイバル

3 ヒリング・ケア

4 ティエリア・アーデ

5 ブリング・スタビティ

6 デイバイン・ノヴァ

7 アニュー・リターナー

この中から選んでください。

アンケートは以上です。

期限は9月末までぐらいにしようと思います。

なお期限を過ぎてもアンケートは受付ますが、アンケート1に関しては受付無いので予めご了承ください。

8話（前書き）

少し投稿が遅れてすいません。

貯めてた分がなくなってしまっ（――；）

今がんばって書いてます。

それに気分転換に始めたジージェネワールドに再びはまってしまい遅れました。

ちなみにこの小説に合わせてイノベイドの部隊を作ってます。

今回は、A Sからストライカーズまでのリボنزの計画です。

ではどうぞ

8話

リボنزSide

これで無印は、終わった。

なのは側は、原作の物語とあまり変わった所は無くとりあえず心安心だ。

ただ変わった所があるとすれば僕がヴェーダを使ってフェイトの保護責任者を僕にしたことぐらいだ。

これは、フェイトがイノベイドだと知られないようにするためだ。

プロジェクトFのデータを寄せと言われたら、プレシアが所有している正式なデータを渡せばいい。

そうすれば脳みそ共の僕への信頼度も上がる。

「これで情報の漏れの心配は、まず無いな・・・」

それに加えて今回のプレシア救出の際に思わぬ収穫があった。

ジュエルシードだ。

新たなGNドライブ開発のため1つ回収してくればよかったのだが、プレシアは、9個全てを嚴重封印して回収していたのだ。

「この残り8個のジュエルシードは、脳みそ共との交渉の帰りに偶然見つけて手に入れたレツリクと一緒にスカリエッティへの手見上げにしよう。」

そして今僕は、管理局本局内にいる。

理由は、2つある。

1つは、フェイトに会いにきたそして保護責任者になるための手続きをするためだ。

そしてもう1つは、

はっきり言ってこっちが本命だ。

リンディ・ハラウンや聖王教会の連中に僕が作る部隊・・・

地上本部所属・第81独立治安維持部隊・・・アロウズとの繋がりを作るためだ。

その理由は、ストライカーズ時の六課にアロウズを送り込む際のスパイの疑いを消すためだ。

地上は海を嫌らっているそのために疑いをかけられる。

その疑いをA Sの闇の書の闇を破壊する際に協力または直接破壊する。

それによりなのは側のからの信用得アロウズは、こちらの味方だと思込ませる。

僕たちには、独自行動の許可を脳みそ共から貰っている。それをうまく利用し介入するつもりだ。

しかしここ（本局）の上の連中は独自行動の許可を良く思っていないようだ。

そこでこの闇の書の闇を破壊する際に協力または直接破壊するをうまく利用する。

手柄を立てた上に第1級搜索指定ロストログアともなれば上もおとなしくなるだろう。

ここまでで特に問題はない。

だが1つだけ問題がある。

「…高町なのは」

そうこの物語の主人公である高町なのはだ。

以前リジエネ達と話していた通り彼女から常人より高い脳量子波が検出された。

ヴェーダで確認をしたので間違いない。

「…まさかな僕の介入でなにかしら起こると覚悟をしてはいたが…」

そう彼女はイノベーターとなり得る存在となってしまったのだ。

だがそこで問題が発生する。

「…どうするべきか：折角現れたイノベイターとなり得る存在だが、原作の主人公の上、管理局の裏を知らない時点で局側だ。」

「それに裏を知った所である性格だ。中から変えろと言いだすだろう。」

そう、リボンズにとって彼女をイノベイターにすることは分の悪い賭けになってしまうのだ。

「…とりあえず今は保留だな。まだ時間はある。それにフェイトの対応によってはこちら側に来るかもしれないしな。」

とりあえず今はフェイトとリンディ・ハラオウンに会いに行くとしてようか。

「あっそうだ！A S始まるくらいに残りのイノベイドとガッデスとかエンプラスとかレグナントとか作ろつと。」

8話（後書き）

まさか！あのなのはにイノベーターフラグが立ってしまいました。

魔王がイノベーターの力を手に入れたら勇者でも勝てない気がします。

9話(前書き)

今回はついにあの人がです。

アンケートの途中経過を発表します。

アンケート1

リン生存 7票

生存しない 1票

アンケート2

原作 3票

スナイパー 3票

クロー 2票

アンケート3

リジェネ・レジェッタ 1票

リヴァイヴ・リバイバル 3票

ヒリング・ケア : 0票

ティエリア・アーデ 3票

ブリング・スタビティ 1票

ディバイン・ノヴァ 1票

アニュー・リターナー : 7票

以上な結果になります。

9 話

リボンスSide

あの後すぐにフェイトを見つけて無事にリンディ・ハラウンと接触できました。

その前にフェイトが抱き着いてきて大変でした（――；）

今回リンディ・ハラウンとは純粹に話をただけです。

部隊のことは、まだ言ってます。ただフェイトが心配なので何か困ったことが起きたら協力すると言っておきました。

その時にリンディ茶を出されました。

「・・・・・・アレは、良い物だ。」

・・・・ハッ一瞬マクベーになってしまった。

話を戻します。

恐らくまだ信用していないでしょうから、何か問題が起きない限り協力は、申し出ないでしょうが・・・

あっフェイトは、問題なく無実になるようなので、今の所はこのままアースラに同行させました。

そして今僕は本局に帰りにプレシアと合流してスカリエッティとの
会う約束をした場所にいます。

場所は・・・もちろん翠屋です。

えっどうして敵の本拠地にしたのかって？それは・・・

灯台元暮らしと言うでしょそれに・・・お約束です。BY作者

だそうです。あれ僕何いってるんだろう？

とにかく今コーヒーとシュークリームを頼んでプレシアと話しながらスカリエッティを待っている。

「・・・そんな恰好でよかったのかい？」

「ええ、こうゆうのは、堂々としていた方が怪しまれないのよ。」

そう言ったプレシアの服装は、研究員の服装にサングラスをかけただけとゆう服装だった。

・・・正直言って周りからの視線が痛いです。

「・・・そうかい。」

「ええ・・・着たみたいよ。」

プレシアがそう言ったので僕は彼女の視線に目を向けた。

そこには、原作を見た人なら一発でわかる恰好しサングラスをかけ

たスカリエツティとウーノが此方に向かって歩いていった。

アンタらもかあああああああ！

そしてスカリエツティとウーノは僕らの座っている席に着いた。

「やあゝ待たせたかい？」

「いいえそれほど待ってないわ。」

「そうかい？では話し合いを始めようじゃないか。」

注意 スカリエッティはプレシアが生きていることについてはすでに知っています。

「ところで少しいいか？」

「なんだい？」

「彼女にも聞いたが君たちもそんな恰好でいいのかい？」

「ん？可笑しなことを言うね？こうゆうのは、堂々としていた方が怪しまれないのだよ。」

「私と同じ考えね。」

「・・・もう何も言わないよ。」

「あの話を戻しませんか？」

「ああそうだね。」

「で、僕の送ったデータは、どうだい？」

「ああ実に興味深い物だったよあれこそまさに僕が求めていた理想的なものだったよ！」

「そうかい気に入ってくれてなによりだ。」

「だけど1つ気になることがあるんだよ。」

「なんだい？」

「あのデータ：既に完成したものなのだろう？」

「へー良く気づいたね。」

「それでも科学者兼医者だからね。」

「…ジェイルの言う通りあれは既に完成され実用化されたデータだ。」

「やはりそうか！ いやリボンズからデータをもらった時、データを見ていて気づいたんだ。これほどの研究をしている者が失敗するはずがないとね。」

「流石は無限の欲望だね。」

「…私の開発コードを知っている上で私に接触したのは何故だい？」

「なに簡単なことさ、僕のやろうとしている計画に協力して欲しいんだ。」

「ほー君ほどの者が私に協力してほしいか…でその計画とはなんだい？。」

「時空管理局を潰す計画。」

その頃リジェネ達はりボonzの要請でティエリア・アーデ、ブリング・スタビティ、ディバイン・ノヴァ、アニュー・リターナーの制作をしていたのだが・・・

「あっ!？」

「どうしたんですか？ヒリング。」

「・・・ティエリアの設定間違えて1stの時の性格にしちゃった。」

「なにやってるんですか!!!」

「リボonzが知ったら怒るよ。」

大丈夫なのか？

9話（後書き）

今回はここまでです。次回交渉の続きを書きます。

10話(前書き)

前回の続きです。

10話

スカリエッティSide

最初今の言葉聞いた時私は、はつきり言って驚愕した。

まさか私と同じことを考えている人間がいるとは・・・

「・・・あえて聞こう正氣かい？」

私がそう言うと、彼は、鼻で笑った。

「別に可笑しな話じゃないだろ？」

「それに君もあの脳みそ共の操り人形になったつもりは無いのだろ？」

驚いた。彼は私の考えまで見抜いている。

・・・なら私の取る行動は決まっている。

「・・・具体的に私は、何をするればいいんだい？」

「それはYesと、とっていいのかな？」

「もちろんさ！こんな面白そうなことに参加しないわけがない。」

「そうかい。」

「ではまず戦力増強のために君のオモチャとしてこれを開発する。」

そう言うとは彼は、端末でデータを見せてきた。

（人間サイズのMS、ジnkス、ジnkス？のデータと同サイズのエンプラスのデータです。）

「・・・・・・・・！？これは、なかなか面白いね。」

「だろ。」

「だがこれを見る限り動力がまだなようだね。」

「そうなんだよ。動力は、できているが小型化もしくは、代わりになる物が見つからないんだ。」

「ちなみに完成している動力はこれよ。」

プレシア女史がそう言うのと動力のデータを同じ端末で出した。（疑似GNドライヴ改良型のデータです。」

「……!? これも面白いね〜でもこのサイズから察するに本来これを搭載する機体は18メートルぐらいの大きさになるんじゃないのかい?」

「さすがだねその通りだよ。管理局の次元航行船と戦うのに必要だろう?」

「なるほどつまりこの人間サイズは、局員用に使うんだね?」

「その通りさ。」

「わかった任せようじゃないか。このGNドライブは私なりに改良するが構わないかい？」

「ああ構わないさ。でもただやらせるのは申し訳ないからこれを受け取ってくれ。」

リボنزはレリックの入ったケースとジュエルシードの入ったデバイスをだした。

「これは！？レリックそれにジュエルシード！？」

「そうだよ君の研究：戦闘機人にはそれが必要なんだろう？ジュエルシードは・・・これの開発にでも使ってくれ。」

「それとこれも渡して置くよ。」

リボنزはお馴染みの端末とデータファイルの入ったメモリーを渡した。

「そうかい？ではありがたくもらっていくよ。」

そして私はレリックの入ったケースとジュエルシールドの入ったデバイスを受け取った。

・・・すばらしい！やはり彼リボنزは、すばらしい！これで私の夢への計画が早まる。

リボنزSide

上手くスカリエッティをこちら側に引き入れることに成功した。

これで計画は加速する。イオリア計画でもリボنز本来の計画でもない。この僕の計画が・・・

「その端末には、僕たちの本拠地の座標が入ってるから遊びに来てくれ。」

「ああぜひ行かせてもらおうよ。」

「では、僕たちは、これで失礼するよ。」

そお言うと僕は席を立ち翠屋を後にした。

その後スカリエッティとウーノは・・・

「このシュークリームは実にすばらしいな！」

「ドクター妹達のお見上げに買って行きましょう！」

「そうだね！すいませーん！お持ち帰りでシュークリーム26個お願いします。」

10話（後書き）

次回イノベイドのあの人がついに!?

11話（前書き）

今回は普通の会話です。

11話

リボنزSide

みなさんこんにちは、リボنزです。

スカリエッティとの会談から半年が経ちました。

この半年の間いろんなことがありました。

スカリエッティはGNドライブの小型化と改良に成功したようです。

どんな改良をしたか気になり聞いてみたら・・・

「まずGN粒子に念話の妨害機能をつけたよ。」

「後はジnkス?とエンプラスの隊長機にジュエルシードを応用させたAMFのシールドとGNフィールドを展開できるようにしたよ。」

「この隊長機のエンプラスならリボنزの言う。魔王砲撃も防げると思うよ。」

マジで!?

それってレグナントのGNフィールドでハイパーバースト防いだみたいになるの!?

聞いた時の感想です。

その改造したGNドライブはMSに使えると思いガンダムルシフェルに実装させました。

その結果GNフィールドがアルカンシエルも防げる物になってしまいました。

それが「これ管理局にとってなんて無理ゲー」と思い始めた頃でした。

スカリエッティにはこのお礼としてスローネアイン、ツヴァイ、ドライの3機のデータを送りました。

どうやらナンバーズの固有武器として使うようです。

因みに今MSの生産状況ですが、ガデッサ1機（予備に2機）ガラッゾ1機（予備に2機）ガッデス1機（予備に2機）ガルムガンダム1機（予備に2機）ラファエルガンダム1機、ガテラーザ2機、クアンタムザンライザー1機、ガンダムルシフェル、1機の開発が終わり今は無人のジンクス？とガテラーザ、レグナントの量産を開始しています。

最終的には一個大隊分は生産する。予定です。

そして今日はついに・・・

「やっとこれで全員がそろったね」

「ええヒリングがミスった時はどうなるかと思いましたが。」

「身体的問題は無かったからね。」

「何か違和感はあるかい？ ティエリア、ブリング、デイベイン、アニュー？」

「いや問題ない。」

「ないな。」

「同じく。」

「特にそんな違和感はありません。」

「・・・ティエリアもう少し口調を柔らかくした方がいいよ。」

「僕は元々こうゆう性格だ。」

「・・・」

「努力はしてみよう。」

「…頼むよ。」

「そういえばフェイトの裁判明日が最後なんだよね？」

「ああつまり明日の夜には、A Sが始まる・・・アレの完成率は？」

「78%と言ったところですね。」

「・・・暴走前に完成は？」

「無論可能だよ。」

「そうかでは、これから始まるのだな…我々の計画が。」

「そうさ管理局を潰し人類を変革させる。・・・そうさ全ては・・・」

11話（後書き）

ティエリアとアニューを出したのに出番少なくてすいません。

ストライカーズで大活躍する予定なので期待せずに待っていてください。

次回ついにAS編です。

リーンは、ほぼ生存予定です。

12話（前書き）

A Sですがほとんどフェイト視点で書きます。

12話

フェイトSide

ようやく裁判が終わり、私とアルフは数年の保護観察の上での実質無罪となった。

今日は、私はリンディさんに艦長室まで呼び出された。盆栽や茶釜があったり、桜の木が散っている部屋だ。
ホントあの部屋は日本の文化を舐めているんじゃないのかな？

そう考えながら艦長室に入る。

フェイト

「リンディさん。呼びましたか？」

リンディ

「ああ、フェイトさん。そこに座って。」

フェイト

「はい。失礼します。」

床に座る。

リンディ

「あ、お茶飲む？」

リンディさんは、砂糖入りのお茶を進めてきた。

リボنزは前来た時おいしそうに飲んでたけど・・・はっきり言うてまずそう・・・」

フェイト

「い、いえ。いいです・・・。」

リンディ

「そう？…あのね、少し聞きたいことがあるんだけど…。お母さんのことどう思う？」

リンディさんはストレートに聞いてきた。まあ、遠まわしに聞かれたほうが嫌だけど。

フエイト

「そうですね…。自分でも不思議なくらい恨む気持ちや、裏切られたという気持ちはありません。」

リンディ

「その気持ちは…本当？」

フエイト

「はい。」

母さんも実は親バカだったりするわけだ。本当にアリシアが蘇生できるのか、アルハザードがあるかわからないのに、さまざまな犯罪に手を出していた。私を生み出したり、ジュエルシードを集めさせたり…。

しかしリボンズによって阻止されて私は今はっきり言って幸せだ。
・
・ヴェーダにアクセスした時
・
・原作見ちゃったから・
・

リンディ

「そう。…本当はね『うちの子になる？』って聞きたかったんだけど…。」

フェイト

「え？」

リンディ

「あついや！別に管理局にスカウトしているわけではないのよ！そりゃAAAランク持ちは魅力だけど、貴女は子供だからちゃんとした大人が付いていないといけないし！私は貴女のことをよく知っているから適任かなって。あはは…。」

フェイト

「…素直にうれしいです。でも私にはリボンズがいますから…。」

リンディ

「…わかったわ、フェイトさん。」

ブ—————ブ—————

不意にアラートが鳴った。通信画面が開く。

エイミィ

『艦長！なのはちゃんが大変です！』

最初にエイミイが出てきた。次に出てきた画面は、なのはがヴィー
タに襲われていた。

フェイト

「なのは！」

リンディ

「フェイトさん、行ってあげて。」

フェイト

「はい！」

これがASの始まりか。

ユーノ、アルフと合流して、転移魔法でなのはのもとに向かった。

フェイト

「バルディッシュ、セットアップ！」

バルディッシュ

>set up<

ガキンッ!!

なのはに襲いかかるアイゼンをぎりぎりで防いだ。

なのは

「フェイトちゃん…?」

ユーノ

「ごめん、なのは。遅くなった。」

なのは

「ユーノくん…。」

ヴィータ

「くっ、仲間か!」

バルディッシュ

>Scytheform<

フェイト

「…友達だ。」

A、
S編が始まった……

12話（後書き）

今回は、ほぼASそのままです。

13話(前書き)

このまま原作で時間稼ぎすると思った読者のみなさん

残念ですが。

今回からまた飛ばしてA S書きますんで覚悟してください。

しかし短いです。

では、どうぞ。

13話

リボنزSide

どうもみなさんリボنزです。

早速ですが問題が発生しました。

ASの進行速度が速すぎてアレの完成が間に合いません！

現在は、フェイトが魔力を収取され仮面の男の話をし終わったぐらいです。

不味い、非常にマズイ！

原因はわからないが、このままだと、なのは側に恩を売ることができない！

「これは、どうすべきか・・・」

「このままだとフルボッコタイムに間に合わないよ？」

くっ

・・・こうなったら奥の手だ！

もう原作もへったくれもない！

「・・・プランを変えるよ。」

「どうするつもり？」

「まずアレはこのまま完成させここミッドに置く。そして・・・」

少しリボンは沈黙した。

「僕は、ヴェーダを使ってリーンフォースを生存させる。」

「
「
「
「
「
「
「
「
な
つ
！
？
「
「
「
「
「
「
「

その場にいた全員が驚愕し

「そんなことをすれば我々の計画の障害となる。」

ティエリアが反発した。

「そんなこと僕は、認めない!!」

「だけどそれしか手がないのもまた事実ですよ。ティエリア。」

「ガンダムを出せば問題ないはずだ！」

「それこそ問題よ！ガンダムを始めとするMSはストライカーズま
で出せないんだから。」

「光学迷彩を展開させれば・・・」

「それでもガンダムの砲撃ではトランザムを使ったとしても、アルカンシエルと同等の出力は、出せない。」

「くっ・・・・・・・・わかった。それが命令なら従う。」

「すまないね、ティエリア。」

「：わかっては、いるつもりだ。」

「代わりと言っちゃなんだけど、君には、あることをやってもらうよ。」

「あること？」

「ああ、それは・・・」

・・・だよ。」

「・・・了解。」

そう言うとティエリアは部屋から出ていった。

「…良いんですか？ティエリアにあんな役回りをさせて。」

「いや、逆にいいんだ。」

「どうゆうことですか？」

「ティエリアは、性格が昔のままでも記憶はちゃんと対話した時ま
でがある。」

「だからこそ、うってつけですか。」

「そおゆうことさ。さて、それじゃあ僕もアースラに行くとするよ。
」

「はい。」

「お土産の翠屋のシュークリームよろしくね。」

「あっ私とアリシア達の分もお願いします。」

「あゝ私もお願いします。」

「僕は、いいや。リヴァイヴは？」

「いいえ僕も結構です。」

「・・・わかったよ。」

・・・なんか最近みんなのキャラ崩壊が酷くないか？

まあいい。とりあえずは、あの一斉砲撃を見れるからよしとするか。

しかし・・・

なぜ進行速度が速くなったんだ？まさか脳みそ共がヴェーダのターミナルを本局に導入したのか？

それとも・・・

「…一度局のデータを洗い浚い見しておく必要があるな・・・」

13話（後書き）

次回はフルボッコタイム／（＾Ｏ＾）／

の予定です。

14話（前書き）

今回は一気にフルボッコタイム手前まで飛びます。

本日の24時でアンケートを終了します。

14話

「すまないな。水を差してしまうんだが時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間が無いので簡潔に説明する。」

クロノは視線を黒い球体に向け

「あそここの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

皆が上にいるクロノに注目する。

クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。

「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。シャマルが手を挙げた。

「えーと：最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらない」

シグナムもシャルの意見に付け足しつつ渋い顔で言った。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータはアルカンシエルに反対する。

「そ：そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる？」

ユーノが説明した。

「あの、私もそれ反対！」

「同じく！絶対反対！！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まった
ら被害はそれより、遥に大きくなる」

「はい、みんな！あと十五分しかないよ」

エイミィが通信で伝えた。

「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

「でも、何とか止めないと……。はやてちゃん家が無くなっちゃ
うの嫌ですし……」

シャルもそう訴える

「いや……。そういうレベルの話じゃないんだがな……。戦闘
地点をもっと沖合いに出来れば」

若干ズレた考えにクロノが苦笑する

「海でも空間歪曲の被害は出る」

ため息を付きたくなる。だが、シグナムの言い分ももつともだ

そこで今までの成り行きを見ていたアルフが――

「ああ！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れた感じにそんな事を言った。

「ア…アルフ。これはそんな単純な話じゃ…」

ユーノが言った。みんなは考えた。そして、なのはの口が開いた。

なのは「ずばつと…ぶっ飛ばす…」

はやて「此処で撃ったら被害が大きいから撃てへん」

フェイト「でも、此処じゃなければ…」

「「・・・あ」」

「クロノ。アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

フェイトが尋ねた。

「どこでもって…例えば？」

「今、アースラがいる場所。宇宙空間」

なのはがそれに付け足す

空を見上げながら、なのはが答えた。話を聞いていたエイミィは、得意げな笑みを浮かべた。

「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

そして右手の親指を立て

「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

「オイ！ちょっと待て君ら！ま…まさか…！」

三人の意見にクロノは驚いた。なのは、フェイト、はてやは笑みを浮かべて頷いた。

「なんとも、まあ…すごい発想ね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こちらのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと数分！」

エイミィはキーボードを操作しながら言った。

「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが…やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言い

「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」

と、フェイト。

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」

空を見上げながら、なのはが言った

「あとはアルカンシエルで蒸発・・・と」

リンディが言った。

グレアムは、アリアとロッテと共に現地の様子をモニターで見ている。

「提督、見えますか？」

「ああ、よく見えるよ」

「闇の書は呪われた魔導書でした。その呪いはいくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人に人生を狂わせてきました。あれの御陰で僕も母さんも・・・他の多くの被害者遺族もこんな筈じゃない人生を進まなくなりました。それはきつと貴方もリーゼ達も

無くしてしまった過去は変えることが出来ない。・・・・・・
・だから、今を戦って未来を変えます」

「アルカンシエル、チャージ開始！」

局員「はい！」

リンディの指示に局員が応える。アルカンシエルの発射準備をする。

黒い淀みの周りにうねっている触手状の生物？が動き回る

そこにエイミーからの通信が

「暴走開始まで後二分」

シヤマルがなのはとフェイトの治療をしていると

黒い淀みの周りの触手の間をぬって何本も黒い柱が上がる

「始まる」

クロノの言葉で皆、戦闘体勢をとった

14話（後書き）

今回はもうASでした。

15話(前書き)

前回の続きです。

アンケート終了しました。

アンケートの結果を次回出します。

15話

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・闇の書の闇・・・」

黒い淀みをみて眩くはやて

直後、闇色のドームが弾ける・・・その中から出てきたのは、見るも醜悪な巨大な怪獣が姿を現す、頭頂部にあたる部分に上半身だけの女性がくっ付いている生物だった・・・

——アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

防衛プログラムが悲鳴？を上げる

「チェーンバインド！！」

「ストラグルバインド！！」

まずはアルフ、ユーノのバインドが防衛プログラムの周囲にある触手を締め上げ、動きを止める。だが、触手の数は多く全然減らない

「縛れ、鋼の軛！でええええや！！」

ザフィーラは白のベルカ式魔法陣を目の前に展開し、そこから現れた魔力の鞭が前方の触手を薙ぎ払う

そして、その薙ぎ払われた大きな触手の残骸である肉の塊は重力に従い海へと落ちていく

その大きな肉の塊はボトボトと辺りの海に落ちていく。海面に浮かんでいる鈴を上から押え付け、どんどん沈ませていく……

——アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

防衛プログラムは再び声を上げている。

おそらくちゃん効いてはいる様子だ

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！！」

物理と魔法の複合バリアを破壊する担当は……

鉄槌の騎士であり永遠の少女の称号を持つ事になるヴィータ

と

未来のエース・オブ・エースであり現在の悪魔高町なのは。近い内に魔王の称号が付くのは時間の問題だろう

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！！」

「ギガントフォーム」

アイゼンにカートリッジをロードさせ大槌のギガントフォームに変形させ

「轟天・・・爆碎！！」

アイゼンを頭上に振り上げると、同時に防衛プログラムと変わらない大きさまで巨大化した

「ギガントシュラアアアアアアアアアアアク！！！！」

振り下ろされたアイゼンは防衛プログラムの最初のバリアをガラスの様に叩き割った。防衛プログラムはアイゼンに叩き衝けられ少し海に沈んだ

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン…行きます!!」

「ロードカートリッジ」

足元にピンク色の魔法陣を展開しレイジングハートを掲げ、カートリッジを4発ロードする

羽を広げたレイジングハートを頭上で何度か回して構える

「エクセリオン…バスタアアアアアアアアアアアアア!!」
「!」

なのはがエクセリオンバスターを撃つ時、防衛プログラムが鉤爪状の触手を伸ばし攻撃してきた

だが、それは目標を逃がさないために不可視型のバインドであるバレルショットにより弾かれた

「ブレイク——」

レイジングハートの穂先から4つの砲撃が発射され、バリアに命中する

更に中央からも砲撃が放たれる。

「シュウウウウト!!」

合計で5つの砲撃が一つになり二層目のバリアを打ち破る

——アアアアアアアアアアアッ!!!

「次、シグナムとテストロッサちゃん!」

シャマルの指示が暴走プログラムの上空背後にいるシグナム達に伝えられた

「剣ツルギの騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン」

シグナムがレヴァンティンを鞘から抜き

「刃と連結刃に続くもう一つの姿」

鞘を柄頭に併せ、カートリッジをロードする

「ボーゲンフォーム」

弓となったレヴァンティンの弦を引き、矢を形成。目標を補足。そして更にカートリッジを1つロードする。

足元に展開した赤い魔法陣からはシグナムの変換資質である炎が燃え上がる

「翔けよ、隼^{はやぶさ}!!」

「シュツルムファルケン」

木曜を補足しつつ限界まで魔力を込めた矢を放つ
バリアに当たると同時に大爆発を起こし三層目のバリアを砕けた

「フェイト・テストロッサ、バルディツシュザンバー・・・行きま
す!!」

足元に金色の魔法陣を展開させ、カートリッジを2発ロードさせる

すると身の丈を超える大剣となったバルディッシュが現れる。そのバルディッシュを身体を回転させながら振り抜く

「ハアッ！！！」

振り抜いたバルディッシュの刃から真空波が出現し触手を切り裂いて、闇の書の闇を竜巻の様に包み込む

更にフェイトがバルディッシュを天高く掲げるとそのバルディッシュの刃に雷が落ちる

「撃ち抜け、雷神！！！」

「ジェットザンバー」

フェイトが振り下ろすと魔力刃は防衛プログラムに向かって伸びていく。一瞬でバリアを粉碎し、そのままの勢いで本体を切り裂いた

——アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

防衛プログラムは悲鳴らしき物を上げながらも新たな触手を生やし、その先に魔力を溜め砲撃を撃とうと魔力を集束しているが

「盾の守護獣ザフィーラ、砲撃なんぞ……撃たせん!!」

いち早く気付いたザフィーラは魔法陣を展開、今度は海中から何本もの白い柱? が突き出てきて触手を突き刺し、切り裂き、本体を串刺しにした

「はやてちゃん!」

シャマルが上空で待機しているはやてに指示を飛ばす。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け!」

はやては夜天の書を広げ詠唱する

足元に白いベルカ式の魔法陣を展開し、杖を上に掲げる。それと同時に防衛プログラムの上空にも同じ魔法陣が展開してその周囲に白い魔力球が6つ、中央に1つの合計7つ現れた。

「石化の槍、ミストルティン!」

杖を振り下ろすと同時に上空にある魔法陣から最初は周囲にあった

6つの魔力球がその後中央から1つ：計7つの光の槍が防衛プログラムに突き刺さった。

——アアアアアアアアアアアア……

防衛プログラムの着弾地点から徐々に石化していき、頭頂部全てが石に変わった……。だが、完全に石化が出来ていない部分がまた再生した。再生後の姿はもはや原形を留めていなかった

「うわっ……。なあ!？」

「何だか……。凄い事に……」

そのおぞましい変貌に嫌悪感を露わにするアルフとシャマル

「やっぱり、並の攻撃じゃ通じない!ダメージを入れた傍から再生されちゃう!」

「だが、ダメージは通ってる……。プランの変更は無しだ!」

エイミイの言葉にクロノは力強く言った

クロノは自分の手に握ってあるデュランダルを見る

「行くぞ、デュランダル」

「OK Boss」

「悠久なる凍土・・・凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

足元にミッド式水色の魔法陣を展開、クロノから冷気が発せられる。
その冷気は防衛プログラムを中心に海も凍らせた

「凍てつけ!!」

「エターナルコフィン」

防衛プログラムにデュランダルを突きつけると、防衛プログラムは凍りついた。だが、まだ諦め悪く抵抗しようとする防衛プログラム。
氷を砕き再び再生を始めようとするが

「いくよ、フェイトちゃん! はやてちゃん!」

「うん!」「うん!」

「スターライトブレイカー」

「全力全開！！・・・スターライトオオオオオオ」

なのはが魔法陣を展開し、環状魔法陣が辺りを取り巻き、レイジン
グハートの先端にピンク色の魔力が溜まっていく

「雷光一閃！！・・・プラズマザンバアアアアア」

フェイトがバルディッシュと構えると魔力刃の部分に再び金色の雷
が込められる

「ごめんな・・・お休みな・・・」

はやては涙ぐみながらも防衛プログラムに別れを告げ、決意を固め
た顔で魔導書を広げた

「響け終焉の笛！！ラグナロク！！」

杖の先端部に白色の魔力が集まっていき、目の前には白色のベルカ
式魔法陣が現れる

3人の魔法に大量の魔力が込められる。そして・・・

「「ブレイカアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」」

——ドコオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!

放たれた。

一斉に放った……その砲撃は、防衛プログラムを同時に捉え大爆発を起こした……

アースラSide

「コアの転送……来ます!! 転送されながら生体部品を修復中! 凄い早さです」

局員の一人がアースラ全体に向けて報告する

「アルカンシエル、バレル展開!」

報告を聞いたエイミィがコンソールを叩きアースラのバレルを展開させる

先端部分から3つのリングの輪のが出現し真ん中に白い魔力が溜まっていく

「ファイアリングロックシステムオープン。命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「了解!!」

こうしている内にも転送された防衛プログラム（と鈴）は宇宙に転送される

リンディの前に丸い鍵穴が出現する。そして、真剣は表情で指令を出す。闇の書のコアが視認出来る距離まで来ると、アースラ内に緊張感が出てくる

リンディは数秒考え、一度深呼吸し

「アルカンシエル発射!!」

鍵穴に鍵を差し、回すとアースラの先端にある魔力球はリンディの言葉と共に一直線にコアに向かって行った

「コアの消滅を確認！」

「再生反応ありません。」

「えーと、・・・取り敢えず、現場のみんな。お疲れ様」

15話（後書き）

ほとんど原作のA S書いて疲れました。

次回はあの人の生存話です。

16話（前書き）

アンケートの結果を出します。

リーンは生存です。

魔王は、スナイパーで狙い打つぜ！

アロウズは、リヴァイヴ、ブリング、アニユー、ティエリア、に決定しました。

アンケートにご協力してくださったみなさんありがとうございました。

> ((<

そして今回はみなさんお待ちかねリーンが生存します。

ではどうぞ。

16話

リボنزSide

どうもリボنزです。フルボツコタイムを見た後アースラに来たんですが何かリーンのことでもめてるようです。

「主はやて、申し訳ありませんが私は消えなくてはなりません」

そうリインフォースが切り出した。

「何でや!？」

「説明してもらおうか」

クロノが真剣な眼差しでリインフォースを見た。

「基礎構造が歪められたままなのです。このままではまた新たな防御プログラムを組み直してしまいます。その際高確率で主はやてはまた侵蝕されてしまいます」

主を守るために・・・だから死を選ぶ。それがリインフォースの答えだった。

それを聞いた全員が黙り込む。

「だめや！防御プログラムなら私がなんとかする！だから！」

「お聞き訳を・・・」

「失礼、良いかな？」

リボンスが話に割り込んだ。

全員がリボンスの入って来た扉に目を向ける。

「リボンス！」

フィイトが名前を呼ぶとリボنزに抱き着いた。

「あら、アルマーク少将、何時此方に？」

リンディが話を切り替えたように話す。

「つい先ほど着いたばかりですよ。」

リボنزは、リンディには前もって来ることは伝えてあるので何の違和感なくアースラに入った。

「フィイトに会いに来たつもりでしたけど何かあったんですか？」

リボنزは何も知らなかったように聞く

「ええ、実は・・・」

・・・と言うことなんです。」

リンディはリーンの現状を話し、リボنزの事を知らないなのは達に彼の説明をした。

「なるほど・・・じゃあリーンフォース君ちよつとそこに座つてくれるかい。」

リボنزは、リーンフォースの前に丸椅子を出して座り、端末を出し軽く左手を振る

その瞬間リボنزの目の前に複数のモニターが展開された

リボنزはそのモニターを少し操作したのち、真剣な表情でじっと見つめる

「リボنز・・・それ・・・」気が散るから静かにしてくれ。」

リボنزの後ろにいたなのは達はそのを見て目を丸くし、代表してはフェイトがたずねようとするが、リボنزは鋭い声でそれを拒否した

アースラの技術者代表であるエイミィは自分達の知る技術のはるか

上に行くであろうリボنزの行っていることに興味を持ち、後ろに回り込みのぞいてみる、

「ツツ!？」

それを見た瞬間思わず息をのむエイミー
リボنزの開いているウインドウにはそれぞれ、なにかを表しているのであろう様々な形態のグラフや容姿のフレームなどが映っていた。

そこに映っていたのは本部にある精密機械で測定された物と遜色ないほど詳細なもの

だがエイミーの驚いたのは特にその中央、リボنزが現在凝視しているモニターだった

そこは他とは違い、黒い画面いっぱいには無数の緑色の文字が高速で流れていた。

エイミーは辛うじて所々の数字は読み取れたが、流れ去る文字列を目で追う事すら出来なかった。

ましてや、今現在は何のデータを見ているのかなど皆目付かない。

そして何かを確認したりボンズは画面のキーボードで打ち込み始めた。

そして10分後

「うん、もう良いよ。・・・これで治ったはずだよ。」

「「「「「「「「「「えっ!?!」」」」」」」」」」

その場にいた全員が驚愕し

「そんなはずは・・・・・・!?!」

「リーンフォースどうしたんや!」

「・・・主はやて・・・本当に治ってます。」

「!?!? ほんまなんか？」

「はい！」

「ばかな!?!? 一体どうやって。」

クロノがリボンスに聞いた。

「・・・リンディ提督は、最近本局に導入されたシステムをご存じですか？」

「ええ、本局に導入された量子型演算処理システムですね。」

「たしか名前は・・・ヴェーダでしたよね？」

「僕たちも、今回の事件の際使わせて貰いましたから。」

クロノが付け足して言う。

「そうです。実はアレ・・・僕が作ったんです。」

「「うそ」」

「本当ですよ。」

「今の本局の数世紀先を行ってる技術で作られてて局内のシステム管理やデータ処理、情報の管理及び整理までしてるあのスパコン並の物をですか？」

エイミィが驚いたように言った。

「ああ、今回ののはそのヴェーダを使って夜天の書にアクセスしてバグの完全削除とプログラムの修復を行ったんだよ。」

「そんなことが・・・」

「じゃあもうリーンフォース大丈夫なやな？消えたりしないんやね？」

「ああ、もう大丈夫だよ・・・家族で仲良く暮らしてくれ。」

「ありがとうございます。」

「いいえ・・・では私はこれで。」

「もう行くんですか？お茶でも飲んでからでも。」

（（（（アレを飲ませるのか！？）））））

「是非飲んで行きたいんですが今回はフェイトの顔を見に來ただけですので仕事もありますしこれで失礼します。」

（（（（アレを飲んでから行きたかっただど！？）））））

リンディ茶を知ってる全員が驚愕した。

「じゃあフェイトこの事件が落ち着いたら帰ってきなよ。」

「うん！また後でねリボンズ！」

「ああ、リンディ提督また何か有ったら教えてください。これでも部隊を持ってるので協力は惜しみませんよ。」

「ええ、その時はぜひお願いします。」

「ではこれで。」

そう言うとりボンは部屋から出て行った。

「鎌をかけてみたが、やはり脳みそ共は、本局にターミナルを置いたか・・・」

リボンはA Sが早まった原因を知るためヴェーダの存在を知っているか鎌をかけた。

「少し計画に支障をきたすが、許容範囲内だな・・・これはこれで良しとするか。」

16話（後書き）

A Sが進んだ原因で転生者が出たと思った人や刹那やグラハ・・・
M rブシドーが出ると思った方残念でした。

ですが今後を考えて場合によって出す可能性を考えなければいけないのでまたアンケートをします。またできるだけ答えてくれるとうれしいです。

第二回アンケート実施のお知らせ

どうもみなさん作者の観月 衛です。

またアンケートを取りたいと思います。

今回は1つだけですが、この選択によってストライカーズのシナリオが決まります。

本音を言うとは親友に「このままだとMSで一方的な武力制圧して終わりになるんじゃないの？」と言われ設定を考えていて決められないのでアンケートで決めようと思ったからです。

こんな作者ですいません。

ではアンケートを取ります。

管理局にMSを持たせるか否かまた持たせると答えた方は、次の3つからMSのデータ入手方法を選んでください。

1 レジアスに接触しMSのデータを渡す。

2 他のガンダムシリーズが好きな転生者を出して六課にデータを渡す。

3 00の原作またはガンダムシリーズの原作キャラをトリップさせてMSのデータを渡す。

なお3を選んだ方は、トリップさせるキャラの名前を一人書いてください。

締め切りは5日です。

ご協力お願いします。

17話（前書き）

今回は、ついにあの魔王が墜ちます。

作者的になのは正義感嫌いなんで・・・ザマああああ

そして今回の最後に意外な人物の名前が出てきます。

ではどうぞ

17話

リボンスide

どうもリボンスです。ASから2年たちました。

今日はあの管理局の白い悪魔が堕ちる日です。

えっ？何もしないのかって？

大丈夫です。既に手は打ってあります。

そんな訳で今回僕は、見てるだけです。

では、後は彼らに任せるとしますか。

ティエリアside

僕は、今雪が降り積もる管理外世界に来ている。

今回僕は、この世界でリボンスからあるミッションを受けてきている。

1つは、プレシア・テストロッサによって開発された、新型の第五世代デバイスのテストを行っている。

このデバイスは、ガンダムのデータを元に作られた。

武装はガンダムやガシリースの物を使用している。

このデバイスの最大の特徴はバリアジャケットと動力だ。

まずバリアジャケットだが1stモードとセカンドモードがあり1stモードはソレスタルビーイングの制服となっており一見普通の魔導師がセットアップする物と変わらない物となっている。

そしてセカンドモードは、バトルスーツを着る様な感覚でガンダムやガシリースを展開させる。

簡単に言うと武装神姫のフルアーマー状態のMSだ。

もちろん顔もMSの頭部で覆われるためセカンドの時は正体が全くばれない。

そしてこのデバイスの二つ目の特徴である動力だが、これは、魔力の源であるリンカーコアを使用しない。

ジェイル・スカリエッティによって改良小型化した疑似GNドライブ改を動力にしている。

しかしオリジナルのGNドライブを使用していないため、活動時間は有限される。

だがそれでも、トランザムを使用しないかぎり一週間ほどの戦闘は可能となっている。

そしてセカンド時のみオレンジのGN粒子を放出する。

粒子供給の際は空気中の魔力をGN粒子に変換できるようにプレシアが改良した。

もちろんだが、起動中は粒子供給はできない。

そしてこのデバイスは、アロウズのみが使用を許される魔力を持たない人間用に開発したという設定も用意し評議会からの許可も得た。

これにより上も文句を言ってこれない。

実際このデバイスは、リボンズ側の者しか使用できない。

僕たちのバイオメトリックスで起動するようにしてあるからだ。

そして今現在僕は、このデバイスのセカンドモードを起動し第三世代のガンダム・・・デュナメスの姿をしてGNスナイパーライフルを構えターゲットへの狙撃体制を取っている。

護衛としてリヴァイヴが、ガデッサを展開し隣に待機している。

そうこれがリボンズから与えられた2つ目のミッションだ。

回想・・・

それはA Sのプランの変更時までに戻る。

「代わりにと言っちゃなんだけど、君には、あることをやってもらうよ。」

「あること?」

「ああ、それは・・・プレシアが開発した僕たち専用のデバイスの性能実験と同時にスカリエッティが作った?型の性能実験の際君も同行して高町なのはを墮としてもらいたいんだよ。」

「・・・手段は？」

「君に任せるよ。」

「・・・了解。」

回想終了

リボンスは、昔の僕を知った上でこの任務を任せたようだが・・・
全くやさしいくせにわざと悪を演じるなんて・・・

僕は再びターゲットである高町なのはを見た。

「まったく、昔の自分を見ているようで嫌になるな。」

「そうなのかい？でも今も昔の性格のままじゃないのかい？」

「・・・それは、違う。」

「？それはどうゆうことなんだい？」

「・・・僕は彼がリボنزの体を作る前から彼を監視していた。」

「えっ!？」

「そして彼が、嘗てのリボنز・アルマークのように人類を支配するなら僕は彼を殺すつもりだった。」

「・・・」

「だが彼は違った。」

「だから？」

「そう僕は、協力を決めこの性格にした方がいいと判断した。」

ティエリアは再びGNスナイパーライフルを構えた。

「自分がどれだけ愚かな振る舞いをしているのかをその身に刻み思い知れ！エース・オブ・エース、高町なのは。」

ティエリアはトリガーを引いた。

「デュナメス、目標を狙い撃つ。」

そしてなのはは・・・

「なのはあああああ!！」

後方からオレンジ粒子ビームによって右胸を貫かれた。

リボンスide

またもやみなさんこんにちは、今回は何もする予定はなかったんですがね〜

さっきいきなりスカリエッティから連絡が入ったんです。

一体なんのようなんでしょうか？

「どうしたんだい？ ジェイル。」

「やゝリボنز、実は私に管理局を潰すために協力して欲しいと言ってくる者がいるんだよ。」

ん？ なんだって！？ …… 管理局に対する反対勢力か、なにかか？

「一体その人物は誰なんだい？」

「それがその人物は……」

だよ。」

はい？

17話（後書き）

ティエリアにロックオンの名台詞を言わせてみました（笑）

そしてシャアがまさかの参戦です。

ですが決してトリップや転生者では、ないので安心してください。

このキャラは管理局に恨みを持ったオリキャラです。

ではみなさんまた次回

18話(前書き)

今回はシャアとの会談です

18話

リボンス side

どうもみなさんリボンスです。

現在僕はスカリエッティと翠屋でシャアを待っています。

最初名前を聞いた時驚きを隠せませんでした。

最初はシャアが初期ガンからトリップして来たのかと思いました。

ですが良く考えるとシャアなら、ネオ（・・・）・ジオンとは言わないので違うと判断しました。

僕は、恐らく転生者だと予測している。

ヴェーダもその可能性の確率が高いと出している。

だが同性同名の可能性もある。

僕は、最初接触するかを考えたがこれは、チャンスだと思った。

転生者の場合普通この世界に来る転生者は、基本俺Tueeee
eeeeeeeとかハーレム目指すなどの願望に満ちた人間が多い。

だが彼・・・シャアの場合は、僕のように管理局が嫌いなパターン
と僕は考えている。

あるいは・・・

（この世界の人間だが・・・管理局に何かの因縁がある。）

だがそれでも、僕は構わない。

彼は、協力を申し込んできたつまりどのみち管理局を潰すまでは、
同盟を組める筈だ。

この会談が終わったら個人的に彼との話し合いをしてこちら側に引き入れてみるか・・・

私はシャア・アズナブル、偽名だが今はこう名乗っている。

今回私は、ドクター・スカリエッティの技術協力を得るため会談をしにこの第98管理外世界の喫茶店へ向かっている。

この交渉で同盟を結べれば対人兵器の開発にこぎ着けるだろう。

しかし・・・彼の言っていた同じ思想を持った協力者とはいったい何者なんだ？

それに、以前にも感じたこの感覚はなんだ？

まあいい今回の会談で分かることだ。

リボンスide

「どうやら来たようだよ。」

僕はスカリエッティの言葉を聞き彼が向ける視線の方をみた。

そこには、クワトロ・バジーナの外見をした私服の男が此方に向かって歩いていた。

やべええええすげえ似てる。つてかシヤア大佐じやあねえええ
えええええクワトロ大尉だああああ

彼を見た時の感想です。

まあいいとりあえず彼、シャア？の動向を探らせてもらおう。

「遅れて申し訳ない。」

「いや我々もちょうど来たところだよ。」

「そうか・・・では早速話し合いを儲けたい。」

「局を潰すのに協力して欲しいだったね。」

「そうだ。我々・・・いや私は今の管理局のやり方に疑念を抱いている。」

「それは僕も同感だよアレはまさに自らを神だと振る舞っているような行為だ。」

「そう、まさにそれだ！」

スカリエッティが同意してきた。

「それで私は、この行為に対抗するため管理局反対勢力としてネオ・ジオンを創設した。」

「なるほど、つまり戦力増強のために我々に協力を求めたと？」

「そのとうりだ。」

「本音は？」

「・・・局には、少し恨みがある。」

「…わかった大佐、君との同盟に同意しよう。」

「賢明な判断に感謝する。」

「では戦力や今後のこちらの予定などは後日この端末に送る。」

毎度おなじみの端末をクワッ・・・シァアに渡す。

「この端末は私たちへ連絡も取れるようになってる。」

「わかった。」

「では、私たちはこれで失礼するよ。」

「いや、すまないが、そちらの青年には残ってもらいたい。」

「・・・わかった。すまないがジェイル先に戻っていてくれ。」

「そうかいでは先に失礼するよ。」

スカリエッティは席を立ち出口に向かった。

「・・・すまないな。」

「なに構わないさ、で僕に何か用があるのかい？」

「ああ、・・・」

君に頼みがある。
」

18話（後書き）

繰り返しますが、シャアの正体はオリキャラなので転生者ではありません。

今後のために反政府組織が必要と判断したので、シャアを出しました。

シャアファンのみなさん勝手にシャアの名前出してすいませんでした。

ではみなさんまた次回お会いしましょう。

19話(前書き)

前回の続きです。

19話

リボンスide

さっきから、この男が現れてから僕の脳量子波になにかが干渉してきている。

「頼みとは何だい？」

しかも、この干渉のパターンは、僕がヴェーダとリンクする時の波長と同じだ。

（！？この男まさか・・・）

「なに簡単なことさ・・・」

君を同類だと見込んでの頼みだからね。」

！？こいつやはり！

「君は・・・イノベーターなのかい？」

「ほお、この力はそう呼ばれているのか？」

「・・・いや、君が僕に気が付くきっかけとなった感覚は脳量子波

と呼ばれる物だ。」

「なるほどでは、そのイノベーターと呼ばれている物について説明をしてくれるか？」

「・・・わかった。」

僕は、イノベーターの特徴や能力を説明した。

「なるほど、つまり私と君は進化した人類とゆうことになるのかな？」

「いや僕自身は、元人間だがイノベーターの出現を促すために人工的にこの体・・・イノベイドの体を築き意識をこの体にインプットした。」

「そんなことが可能とはな・・・」

「今後イノベーターは、君のように次々と現れるだろうがその過程で邪魔になってくる者がいる。」

「・・・管理局か。」

「そのとうりだ。」

「たしかに奴らがこのことを知れば、平気で人体実験を行うだろうな。」

「ああ、だから今後のためにも管理局・・・本局は潰す必要がある。」

「それが君の戦う理由か？」

「ああ、後個人的に嫌いだとゆう理由もあるが。」

「ふっ…なるほど、話がそれたなすまない。」

「構わないさで頼みとは？」

「君が…いや正確には君たちイノベイドが持っていると思われる全身がアーマーになるようなデバイス・・・」

「!？」

いつ知ったんだ？アレは、あの事件以外テストはしていない。

まさかあの現場にいたのか？

「アレと同じタイプの私専用の物を開発してもらいたい。」

「・・・いつ知った？」

「つい先日 of 局の高町なのは墜落 of スキャンダル of 際私も現場にいたんだよ。」

「なるほど…その際脳量子波感じ違和感を頼りに進んだ結果アレを見同じ感覚を持った僕に目星をつけたとゆうことか。」

「そのとうりだ。」

「わかった。何か要望はあるかい？」

「最高のスピードを頼む金の閃光と白い悪魔に対抗するためにはスピードは必要不可欠だ。」

「わかった1ヶ月ほどで作る。」

作る機体は決まったな。

フル・フロンタルではないが渡す機体はシナンジュがいいだろう。

「すまない、では私はこれで失礼する。」

「ああ、では今後よろしくシャア。」

「もちろんだリボنز。」

僕たちは、硬い握手をし同盟を結んだ。

19話（後書き）

シャアはイノベーターでした。

シナンジュにしたのは、あのセリフを言ってもらいたいからです。

ではまた次回お会いしましょう。

20話（前書き）

今回はシャアの演説です。

自分なりに最高のものを書いたと思いますので読んだ方はぜひ感想を聞かせてください。

では、どうぞ

20話

リボンス side

皆さんこんにちはリボンスです。

今大変なことになってますよ。

シヤアにシナンジュのGNドライブ搭載型のデバイスとシナンジュ（GNドライブ搭載）の機体を渡してこちらの戦力を教えたんですよ。

それから2年なのは達が中二になったんですけど、今彼はミッドを含む管理世界の放送ネットワークにハックして演説を始めたんですよ。

僕とジェイルで協力してハックと管理局の予算に関する汚点のデータをあげたんですけどね。

しかし僕は楽しみですよ。

この演説で管理局いや・・・世界がどう動くか！

あつ始まったみたいです。

『これらのデータからわかるように時空管理局は地に堕ちている！！
人員が少ないにもかかわらず、彼らは嘗て知恵と努力での力を世界に知らしめていた。

しかし今は、くだらない権力を維持しようとしただけでなく、他人の技術を盗み、ロストログアだからと
言う理由でその世界で強奪を行っている。

更に己の信念を優先して、まだ成人にもならない少年少女を魔力があるからと戦火に巻き込み、果てはミッドが有する税金や寄付をも、
独断で海の方が危険だからと地上の予算を削減した！！

優秀な地上の魔導師も海が金で引き抜き行っている。

その結果は諸君らの知っての通り、地上での犯罪率は、年々増え続けている。

だが、本局はそれは地上の対応が遅いからだと言った挙句、
更なる予算削減をして来た。

その予算はどこから来てると思う、先ほども言ったようにミッドの
市民からの税金や有志による寄付だ。

確かに次元世界での依頼料や、管理世界からの寄付などもあるとは思われるが、殆どが税金や有力者からの寄付から来ているのだ。

それなのに予算は本局が大半をもって行く。

ミッドの平和を維持しているのは地上部隊なのにだ！！

それなのにこの対応はあまりにもおかしすぎる！！

さらにロストロギアに関しては海の連中は艦船の艦長に全権が渡されその判断で動く。

たとえば間違っても自分の次元とは無関係なので、何らかの処罰、もしくは降格程度で済む。

犯罪者の逮捕を優先して、世界に被害が出るのを無視したなども起こしている。

海の連中が介入して状況を悪化させたケースは少なくない。

『ロストロギアは管理局が管理しなくては』の思想のもと、良くも知らないのに勝手に封印、そしてほぼ強制的に持っていく。

抵抗する場合は犯罪だとか言って権力を使う。

これではどちらが犯罪者か、私には判断がつかん。

その星の人たちの方が知っているかもしれないのに、連中は管理局

の技術力が一番だと言う驕りで相手の話も聞かない。

暴走したら無視をし自分たちだけ逃げたケースもある。

そのあと意気揚々と強制介入して管理外世界を管理世界にしている
！！

何故だ！？

これでは自らを神だと言っているような行為だ！！

管理局は神ではない！！

これで分かるだろう、我らと管理局は相容れない。

故に、私シャア・アズナブルはここに、管理外世界を拠点とした反
時空管理局、通称『ネオ・ジオン』の建立、及び時空管理局への宣
戦布告を宣言する！！

そのためにも、諸君らの力を私に貸して欲しい。

そして我々は管理局を、いや、身勝手な行為を行う腐敗した連中を
粛清することにより、我々は真の意味で人々を、人類を守る存在と
成りうるであろう！！』

『ジークジオン！』

名言きたああああああああああ宣言を聞いた管理外世界の人
も一緒に言ってる

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
ジオン！！！！ジークジオン！！！！」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

さて本当にこれからどうなるんだろうな・
・
・

20話（後書き）

作者も今後どうなるかわかりません。

原作に合わせて進めたいと思いますが・・・

では次回

21話（前書き）

ついにストライカーズに突入です

21話

リボンズ side

この独立宣言は各管理世界に大きな衝撃を与えたようです。

管理局はこんなの言いがかりだと言ってシャアをS級次元犯罪者に仕立て上げたようです。

ミッドで起きるネオジオン関連の事件は全てアロウズが担当することになりました。

そしてシャアの宣言から5年たち今日ついにストライカーズ開始です。

そうここからが本編が始まるのさ！

ふふふふ

はっはっはっはははははははははは

Side はやて

長かったな。

最初に、この部隊を設立しよう思ったんは、あの空港火災の時や。

対応が遅い。それだけで、救われるはずの命が救えない。

それに、カリムのあの予言のこともある。

だから私は、この部隊を立てることにした。

そのために、色々な人に協力してもらっとる。

「……ちゃん……はやてちゃん！」

「んお？」

私が顔を上げるとそこにはなのはちゃんとフェイトちゃんがおった。

あらら。ちよお考え没頭しすぎたわ。

「もう。何回呼んでも反応無いんだから」

「あはは。ゴメンな。ちよお考え事や」

「大丈夫？ はやて」

「大丈夫や。ありがとなフェイトちゃん」

「はやてちゃんは最近考え事ばかりですう」

「主はやて妹の言う通りです。」

ありや。ラインとアインにも言われてもうた。

だって、なあ。

「そういえば。どうしてここに呼んだの？」

「いや………実はな。クロノ君から、この六課に何人が助っ人が来るって話があつてな」

「助っ人？新しいメンバーってこと？」

「でも。何で？開設式の時に来ればよかったのに」

そうやな。

実を言うと、もう六課は始動しとる。

大体一週間くらいやな。

「それなんやけど。理由を聞いたら、向こうさん、仕事はかなりハードでようやくスケジュールが空いた、って話なんや」

「……それほどまでにここに來たがる人っているのかな？」

「皆さん管理局のアイドルみたいな存在ですから」

「まあそれとこれとは別やと思うけどな。で。クロノ君に誰が來るって聞いても、「秘密だ」の一点張りや」

「それは……」

「私たちの知ってる人かな？」

「さあ。実力は確かやけど。性格に難があるらしいで」

ホンマ……ただでさえ私たちのところは色々なところから目え付けられてるのに。

「で。その人はいつ来るの？」

「正確にはその人たち、やな」

「たち？複数人？」

「せや。まあ何人来るかは分からんけど。ちなみに今日来るらしいで」

「えっ！？今日！？」

あーもー。なんや知らんけど。マジで頼むわ。そんな急いでこなくてええて。

「まあ。来るもんはしゃあない。とりあえず。もしかしたらスターズとライトニング両方に入れるかもしれんから。よろしくな」

「「了解」」

ハア。前途多難や。

カリム side

その頃カリムは自室で、自身の出した予言を見直していた。

しかしその予言は現在新たな予言を出している。

——古い結晶と無限の欲望が交わる時、死せる王の下、赤い彗星と変革者により聖地よりかの翼が蘇る。

しかしそれは始まりにすぎず、死を恐れるな、のもと、鉄の巨人と革進者が踊り、数多の海を守る法の船は脆くも砕け落ち、それを先駆けに法の塔はむなしく焼け落ちる。

そしてその後世界は新天地を求める星を渡りし者によって終焉を迎える。

しかし変革者が放つ世界と未来を照らす光により世界は救われ人々は革新と進化を遂げるであろう。

「この予言は……いったいこのミッドで何が起きようとしているの!?!」

21話（後書き）

ついに書きたかったストライカーズ編です。

テンションめっちゃ高いです。

そしてこの予言ですが00のマンガを読んでは、意味や最終決戦の予想ができるはずです。

では次回また会いましょう。

22話(前書き)

今回は六課への転属話です。

累計 P V 1 1 2, 3 2 1 アクセス

ユニーク 1 7, 7 4 1 人

.....え？

(;つDC) ゴシゴシ

.....

ウソ——Σ (。D。) ノノ——ン!!!!？

マジ感激です。こんなに見てくれる人がいるなんて、終わるまでに10万アクセスいけばいいと思ってたので、今後もがんばっていきましょう。

本当にありがとうございます。

22話

リヴァイヴ side

「……さて、八神二等陸佐はどこですかね？」

一応、ここに来るまでに書類には目を通してあるので、八神二等陸佐の顔は知ってている。

だが、その八神二等陸佐がどこにいるのか分からない。

高確立で部隊長室にいるのだろうが、生憎と今の僕には部隊長室の場所が分からない。

……困りましたね。

確かに、機動六課に来るまでの時間はある程度早めることが出来た。

しかし、それは八神二等陸佐に会うという前提の元でだ。

早く会うことが出来なければ、この努力も無駄になる。

（とにかく、誰かに聞いた方が良いですかね）

そう判断し、近くを横切ろうとした人に声をかける。

「あの、すみません。少し宜しいでしょうか？」

「え？ あ、はい。何でしょうか」

幸いにも、その人は丁寧に対応してくれる人だった。

僕は人と会話するのが苦手という訳ではない。

基本的に初対面の人にも自分の意見を言うことができる。

しかし、今回のように運用したばかりで忙しい人に声をかけるとい
うのは気が引ける。

人の邪魔はあまりしたくないのだ。

だから、このことではこの人に、申し訳ないと思う気持ちがある。

「八神二等陸佐に会いたいのですが、部隊長室はどこにあるでしょう
か？」

「えーっと、八神部隊長にどのような用事が？」

「我々は今日からこの機動六課に異動する者なので、まず最初に八

神二等陸佐に挨拶をしようと思ひまして」

「それなら、ちょっと待ってて貰えますか？　今から確認しますの
で」

「分かりました」

僕達から視線を外し、画面を展示させる。

僕達の言葉通りに本当に転入者かどうか確認をするのだろう。

そして、考えた通りに確認作業に入った。

数秒後、確認を終えたのか画面を閉じ、視線を僕に向けてきた。

「確認ができました。八神部隊長の所までご案内します」

「ありがとうございます」

ずいぶん早い確認作業だ。

人間にしてはやるね。

「では、私に付いてきてください」

「はい」

そう言われて、僕達は付いていく。

途中で、何処まで丁寧な対応なんだろうかと、そんなことを疑問に思った。

僕の部隊では、まずこのような対応は無い。

まあ、だからと言って、荒っぽい対応でも無いのだが、この人のように教本に書いてあるような対応の仕方はしない。

故に、僕はそう思った。

しばらくして、僕は部隊長室の前にたどり着いた。

「わざわざ、ありがとうございます」

「どういたしまして。では、私は仕事がありますので」

「お忙しいところにすみませんでした。」

「構いませんよ。では、失礼します」

女性は最後にそう言ってから、去っていく。

今更ながらに、彼女の名前を聞くのを忘れていた。

しかし、今ここで引き止めるのはやめておこう。

これから、仕事の種類は違うものの、同じ場所で仕事をするのだ。

だから、今ここで聞かなくても、いずれ分かるようになる。

ただどあくまでフリだけだね。

それに、僕は最優先で八神二等陸佐に挨拶をしなければならない。

扉に近づくと、扉が横にスライドして開き、そのまま入る。

「失礼します」

部屋の中に入り、僕たちは敬礼をする。

すると、デスクに座っていた3人の女性が視線を僕に向けてきた。

「本日付で古代遺失物管理部機動六課との合同捜査のため派遣されました。ミッド地上本部・第81独立治安維持部隊アロウズ所属、リヴァイヴ・リバイバル一等空尉です。」

「同じくアニュー・リターナー空曹長です。よろしくお願いします。」

「・・・ティエリア・アーデ階級は一等空尉だ。」

「・・・同じくブリング・スタビティ。」

「どうもご丁寧に部隊長の八神はやて二等陸佐です。」

「スターズ分隊、隊長の高町なのは一等空尉です。」

「ライトニング分隊、隊長のフェイト・T・ハラOWN執務管です。」

さあ計画の始動です。

せいぜい楽しませてくださいよ機動六課……いや人間のみなさん。

22話(後書き)

次回に続きます。

23話(前書き)

前回の続きです。

そして短いです

リボンスガンダムMK2ですが書いた原画が見つかって名前も書いて合ったので本来の名前に変更します。

名前はガンダムルシフェルです。

<http://mitemin.net/image/manager/top/icode/32509/>にアクセスすれば原画が閲覧できます。

23話

リヴァイヴ side

「堅苦しい挨拶はこのくらいにして、とりあえず二人ずつに分かれてスターズとライトニングについてももらいたいんやけど。」

「残念ですがそれはできません。」

「!?!? 何ですか?」

なのはが今の事に対し質問をする。

「我々は、レリック絡みでネオジオンが介入してくるとゆう情報を手に入れレリック担当のこの部署に配属されたに過ぎない。」

ティエリアが答えた。

「ゆえに、我々に関してはアロウズとしての分隊にしてもらう。」

「・・・わかったでもこの部隊にいる内はうちに従ってもらうで！」

「わかりました。」

「了解です。」

「…了解」

「僕は、辞退させてもらう。」

「!?!?なんでや!」

「僕たちは、一人々人に本局から独自行動の許可を持っている。」

「「!?!?」」

それを聞いたのはやては聞いて驚く。

「つまり、one・man・army・・・たった一人の軍隊って意味だね。」

フェイトが意味を理解し2人に説明するように言う。

「その通りだ。」

「そんなかつt「免許があると言ったはずです!」」

なのはが異論を唱えようとしたがティエリアによって遮られる。

「それに3人はどう知りませんが、僕は貴方達となれ合うつもりも親しくなるつもりもありません。」

「「!?!」」

ティエリアが衝撃の一言を言った。

2人は驚いたがフェイトや僕たちは、呆れている。

待ったくこんな喧嘩を売るような真似して

「話すことがこれ以上ないならこれで失礼する。」

ティエリアが部屋を出ていく。

「すみません部隊長、彼人見知りであまり心を開かないんです。」

アニューがフォローを入れる。

「まあ世の中いろんな人がいるからな平気やで。」

気分は最悪だろうなティエリア

彼女・・・高町なのはは、何も変わって無かったんだから・・・

23話（後書き）

次回はファーストアラートの予定

24話（前書き）

ファーストアラートです。

みなさん灼シヤナの最新？？？読みました？

僕は地元の本屋で買って読みました。

なんか僕的に納得があんまりできない終わりでしたよ。

24話

リボンズside

どうもリボンズです。

あゝ今日ファーストアラートですね。

なんか実感わきません。

そういえばレリックの回収ジェイルに頼まれましたね。

ディバインにでも回収させますか・・・いや

そうだこの際彼を呼ぼう最近開発したアレの実験もかねて。

ふふふ

（Side ティアナ）

「はい、整列！」

高町教導官の掛け声に、私達はいったん集まった。

皆の様子を見ると、全身汚れだらけで、肩で息を切らしている。

私も似たようなものだけど、訓練校に入る前の経験があるから、そこまで酷くはない。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト一本！皆、まだ頑張れる？」

「」「はいっ！」「」「」

ラストはシュートイベーションで、教導官の攻撃を誰一人非弾せず
に5分間逃げ切るか、一撃を加えるか。

5分間も逃げ切る自信なんて、少なくとも私には無い。

「このボロボロの状態で、教導官の攻撃を捌き切る自信、ある？」

「無いっ！」「同じくです。」

それに答えたのはスバルとエリオだ。

ここまでくると、いつそ清々しい。

「じゃあ、なんとか一発入れよう！」

「はいっ！」

兎に角、これでやるべき事は決まった。

あとは、作戦を考えてそれを実行するだけ。

「準備はいいみたいだね？それじゃあ、レディ・・・ゴー!!」

教導官の初撃を回避した私達はそれぞれが配置につく。

《スバル、ウイングロードを展開して！シルエットとオプティック
ハイドで隙を作るから!》

《了解っ!!》

《エリオとキャロは指定のポイントで一旦待機っ！意識を逸らせて
いる間に、強化魔法で一気に勝負に出てっ!!》

《《はいっ!!》》

案の定、幻影の私とスバルに向かって攻撃をしかけた。

これで、ほんの僅かだけど隙が出来る。

「うおおおおお!!」

不可視の魔法で姿を消していたスバルが、教導官に迫る。

でも、それもあっさり防がれる。

分かっててはいても、やっぱりレベルの差を感じてしまう。

「はっ?!」

逆にスバルは隙が出来てしまい、攻撃されるも、何とか回避。が。

回避後の動きが甘い。そのせいで魔力弾に追尾されてるし。

「スバル馬鹿っ、危ないでしょ?!」

「ご、ゴメン〜!」

まったく、作戦の第一段階はクリア出来たとはいえ、アレじゃ意味が

無いじゃない！

《待ってなさい、今射ち落とすから……。》

狙いを追尾弾に絞り、トリガーを引く！

パシユンッ！！

「えっ?!」

ちよっ、ここにきて不発?!

「わあゝ、ティア援護ゝ!!」

「このっ、肝心な時に……!!」

急いでカートリッジを入れ替えた私は、今度こそ追尾弾を射ち落とした。

あとは、あの二人に任せるしかないわね……。

私は教導官を牽制しながら、その時を待つ。

私とフリードの攻撃をかわした教導官は、エリオ達に気付いた。

ここでやらなきゃもう後が無いっ!!

「エリオッ、今っ!!」

「ストラーダッ!!」

《メッサーアングリフ!》

教導官と接触したエリオは、反動で飛ばされた。

「外した・・・?!」

もしそうだとしたら、万事休すね・・・。

煙が晴れると、そこには変わらず教導官が飛んでいた。

やっぱりだめだった・・・?

《Mission Complete.》

「お見事！ミッション・コンプリート！」

教導官とレイジングハートがそう告げた。

「本当ですか？！」

思わずエリオが聞くと、胸の少し上の辺りを指差した。

そこには確かに、バリアを抜いてジャケットまで届いた証拠があった。

「「わぁ・・・！！」」

エリオとキャロが嬉しそうに笑う。

まあ、今回の大手柄が自分達なんだから当然よね。

そうして、一旦訓練は終わった。

バリアジャケットを解いた教導官に、お褒めの言葉を貰った私達。

「ティアナの指揮も、だいぶ筋が通ってきたみたいだね。」

指揮官訓練、受けてみる？」

これだけの訓練をしておきながら、更に訓練を勧めるとは……。

流石は《管理局の白い悪魔》。容赦が無い。

そう思った事を悟られないように、今は訓練だけで手一杯である事を告げ、断った。

スバルが隣で笑うが冗談じゃない。こっちは死活問題だ。

そんな事をしていると、キャラ達が何か焦げ臭いと言う。

匂いの発生源を探すと、それはすぐに見つかった。

「ちょっとスバル、あんたのローラー。」

「え……？うわぁ、ヤバッ！！」

見ると、ローラーから煙が出ていた。酷使し過ぎたのだろう。

それは私のアンカーガンも同じだけど……。

その事を教導官に伝えると。

「皆だいぶ慣れてきたみたいだし。・・・そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな？」

「新、デバイス・・・？」

私達には、何の事だか良く分からなかった。

Side Out

―隊舎前―

訓練を終えたなのはとフォワード陣は、その後の説明をしながら歩いていた。

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを使って、着替えてロビーに集まろっか。」

「」「」「はいっ！」「」「」

「?あの車って・・・?」

そんな話をしていると、前方から黒い車が走ってきた。

彼女達の前に停まった車の中にいたのははやとフェイトだ。

聞くと、その車はフェイトの物らしい。

「皆、訓練のほうはどないや?」

「あゝ・・・、あはは・・・。」

「頑張ってます。」

はやとの問いに、スバルとティアナが答えた。

「ゴメンね、エリオ、キャロ。私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて・・・。」

フェイトは二人に申し訳なさそうに言う。

「あ、いえ、そんな・・・。」

「大丈夫です。」

二人は笑って返事をするが、やはりフェイトは心配そうだ。

「四人とも良い感じで慣れてきたよ。いつ出勤しても大丈夫!」

そんなフェイトの不安を払うようになのはは続けて言った。

「そうかぁ。それは頼もしいなぁ。」

四人を見ながら、励ましも込めてはやては言う。

四人とも、まんざらでもなさそうだ。

それから、フェイト達はそれぞれが向かうべき場所に行くために、その場を後にした。

—シャワールーム—

「スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃って、御自分で組まれたんですね?」

スバルに頭を洗って貰いながら、キャロが二人に尋ねる。

「私はね。でもティアは確か、訓練校に来る前に作ったんだよね？」

「そうよ。訓練校には杖しか無いのを聞いていたからそれでね。組み立てたってわけ。」

「私はベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし。」

「そのせいで訓練校じゃ目立っちゃってね。」

当時の事を思い出しながら二人は語った。

「あ、もしかしてそれでスバルさんとティアさんは友達になったんですか？」

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりって言って。」

「えへへ。」

それから二人を残して先にあがったティアナは、髪を乾かしている。

その首筋の裏には、小さな紋章が刻まれている。

一方、その頃エリオはというと。

「はあ。皆、まだかなあ？」

「キュクルー」

エリオとフリードが黄昏ていた。

24話（後書き）

今回はここまで次回は戦闘シーンを書きたいと思います。

25話（前書き）

少し飛んで

リニアレールの話です

アンケート終了しました圧倒的に1が多かったです

アンケートに答えてくれた皆さんありがとうございます

25話

なのはSide

えーと。ここはヘリの中。

空を飛べない皆の代わりに運んでくれる六課の大事なヘリ。

で。今この内部は現在非常にみんな、緊張しています。

「え、えーと。ぶつつけ本番になるけど。訓練どおりやれば、大丈夫だからね」

「」「はい!」「」「は、はい!」「」

キャロは俯いてしまっている。

私は、ここで降りて、敵を迎え撃たなければならない。

けど、その前に。

「大丈夫だよ」

「え……」

「一人じゃないよ。皆もいる。念話で私たちにも繋げる。だから、怖がらなくていいよ」

「あ、はい！」

うん。いい返事だ。

「それじゃあ。頑張って」

「」「はい!!」「」

「うん。じゃ、スターズ01、高町なのは。行きます！」

私は飛び立った。

くSide フェイトく

フォワード陣は、初の任務だ。

ガジェットに負けなくらいの実力を持っていても、その場の雰囲気
に吞まれるかもしれない。

あの子達の負担を少しでも減らせるように、上空の敵は何としても
抑えないと。

リボنزの計画では誰かが回収する予定だけど

でも、心配なのはそれだけじゃない。

・・・なぜだか分からないけど、酷く胸騒ぎがする。

一刻も早く現場に向かわないと。

「バルディッシュュ!!」

《Yes, sir.》

バリアジャケットを纏った私は現場へと向かう。

フォワードside

現場に降下する前に、フォワード陣は任務内容の最終チェックをしている。

その顔は真剣そのものだ。

だが、初の実戦の雰囲気には呑まれている訳では無い。

程よい緊張感が漂っている。

今回、彼女達に与えられた任務は、全てのガジェットの破壊と、レリックの確保。

リインは彼女達の顔色を伺いながら、説明を続ける。

「スターズ分隊、ライトニング分隊、二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。」

レリックを乗せた7両目の重要貨物室を目指し、どちらかの分隊が確保すればミッションクリアとなる。

「」「はいっ!!」「」

ラインの指示に、4人は返事を返す。

そこには、先ほどまでの不安は既に無い。

「で。私も現場に降りて管制を担当するですう！」

最後に、ラインは笑顔で締めくくる。

それからすぐに

「さーて新人ども。隊長さん達が空を抑えてくれるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか?!」

ヴァイスは、彼女達に最後の確認をする。

それに彼女達ははっきりと答えた。

「スターズ3、スバル・ナカジマ。」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「行きますっ!!」

最初に降りたのはスターズ分隊。

それを確認したヴァイスは、続けてライトニングに確認を取る。

キャロは、少し不安が抜け切らなかったのか、表情があまり良くない。

「一緒に行こうか？」

それに気付いたエリオが優しく声をかける。

一瞬キョトンとするも、すぐに笑顔になり、二人と一匹は飛び降りた。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル。」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「キュークー！」

「「行きますっ！！」」

ヒリング side

ヒリングは現在リニアレール内にいる

「……っで、この車両の中にレリックがあるんだったわね。」

はあ、めんどくさ……よく見たらフォアード達が戦っているのが見える、空はフェイト達か

「まあ、ガジェットに気が向いてるうちに……」

列車の中にあるレリックを列車のなかに出来ているスキャナを使い、詮索する

「アッ、この危険な反応は……レリック発見♪」

「取り合えず嚴重に封印しいて。」

ヒリングはレリックを嚴重に封印した。

「さてリボンスが呼んだ彼が来る前にさっさと撤退しますか。」

ヒリングは光学迷彩を展開し撤退していった。

なのはside

何とか新型ガジェットを撃破して後はレリック回収だけなんだけどいきなり、ロングアーチから再び通信が来ました。

『こちらロングアーチ緊急事態！その空域にあ、アンノウンが3機接近中です！は、はやい……』

「ええ?!」

『先頭の一機は後続機のさつ3倍の速度で接近中です。』

今度は何!?!もしかしてまた新型!?!?

『アンノウン、肉眼で補足まであと・・・』

「?!ロングアーチ?どうしましたこちらスターズ1応答願います・
・通信できない!?!」

どうなっているの!?!?

「なのは!」

「フェイトちゃん!」

「大丈夫?」

「うん私は大丈夫だよ。でもいきなり通信が切れt「なのは!」!」
?」

フェイトちゃんが無かに気づき私もその方向を向く

「何アレ？」

その方向には3機の人型のロボットがオレンジ色の光を放出しながら此方に向かって接近してきます。

「・・・！？いけない！ヴァイス聞こえる？」

フェイトちゃんが突然ヴァイス君を呼びました。

『なんとか。どうやら至近距離なら通信可能みたいです。』

「そう、なら急いで通信可能な位置までフォワードのみんなを避難させてロングアーチとコンタクトを」

『フェイトさんどうs「急いで！」！？了解っす。』

フェイトちゃんがすごく慌ててます。

「どうしたのフェイトちゃん？」

「・・・なのは今向かってきてる機体には真剣に戦わないとすぐに墮とされるよ。」

「急にどうしたのフェイトちゃん」あの機体はシナンジュ・・・赤

「い彗星だよ。」!?」

なのはは、その名前を聞いて驚愕した。

「赤い彗星ってあの?」

「うん：反管理局組織、通称ネオ・ジオン、その総裁でS級次元犯罪者シャア・アズナブル大佐：別名赤い彗星。」

「：聞いたことあるよ。たった一人で2隻の次元航行船を沈めたと言う・・・赤い彗星のシャア。」

「そう・・・!? 来るよ!」

その言葉で私とフェイトちゃんはデバイスを構えましたその瞬間赤い機体シナンジュが急接近してきました。

「見せて貰おうか。管理局の白い悪魔の性能とやらを。」

25話（後書き）

次回赤い彗星VS管理局の白い悪魔

26話(前書き)

前回の続きです。

26話

なのはside

シナンジュがなのは達に急接近した。

「アクセルシューター」

「プラズマランサー」

<accelerator shooter>

<plasma lancer>

接近をさせないように二人は弾幕を張ろうとする

「シュートッ！」

「ファイアッ！」

シナンジュに向けてシューターとランサーが発射される。

しかしシナンジュは全てぎりぎりでかわしGNビームライフルを連射しながらせながらなお接近してくる

「くっ!？」

「はい!」

「なら!」

なのははレイジングハートをシューティングモードにした。

「デイベイーーン」

<D i v i n e b a s t a r d>

「バスターー!」

ピンク色の巨大な砲撃がシナンジュに向かう

「あまいな!」

しかしシナンジュは砲撃が来るのが分かっていたようによける。

「っな!？」

「当たらなければどうとゆうことは無い!」

その隙にシナンジュは、なのはに接近しGNビームサーベルを抜く

「!しまった!？」

<protection>

「遅い!」

なのははプロテクションを張ろうとするが間に合わない。

「墜ちろ!」「はあああああ」「なに!？」

フェイトがハーケンを展開したのはがやられる前にシャアに接近戦を仕掛けた。

「チツィイ!」

ハーケンとビームサーベルが接触し接触部からスパークが発生する。

「ネオジオン総裁シャア・アズナブル公務執行妨害と質量兵器の使用および殺人未遂の容疑で逮捕します。」

フェイトがシャアに向かって言う。

「ほおう？君にできるかな？管理局の金の閃光！」

「やって見せます！」

「そうか…だがまだあまい！」

「!？」

シャアはスラスターの出力を上げフェイトを押し始めた。

「くっ」

フェイトは一旦シャアとの距離を置くため離れた。

「なのは！」

フェイトは、なのはの名を呼んだ。

「エクセリオンバスター！」

「なに！？」

フェイトが接近戦を仕掛けている間にエクシードモードになったなのはがエクセリオンバスターを放った。

「チッイイ！」

シャアは避けようとしたが完全には避けられずにシナングユの右足を軽く被弾した。

「この程度どうとゆうことは無い！」

シャアは体制を立て直し再び接近してくる。

「くっどうすれば…」

<マスター別方向からアンノウンが接近中です>

「!？」

「敵の増援!？」

<違いますこの識別は…>

『高町一等空位無事ですか?』

突然通信画面が開きアロウズのリヴァイヴが出た

「リジェネさん！」

『ヴァイス陸曹から連絡をもらいました。これよりそちらの援護します。』

「援護って?」

<マスター別方向から熱源来ます!>

その瞬間オレンジ色の粒子ビームがシナンジュに向けて飛んできた。

「アロウズか！」

シャアは粒子ビームを避け

「この状況では我々が不利だな……ここは撤退させてもらう。」

そう言うとシャアはあつと言う間に空の彼方に消えて行った。彼女たちはそれを黙って見ていることしかできなかった。

26話（後書き）

今回はこれで終わりです

また、ためておいた分が無くなったので投稿までしばらく掛かります。

すいません。

27話（前書き）

レジアスとリボنزの回想です

27話

それは、シャアの演説から一週間たったある日雨の日

レジアス side

ここは、私の友が眠る場所。

ここに私は呼び出された。

私に次いで少将になった男リボンズ・アルマークに

「レジアス・ゲイズ少将だね。中將への昇進も確実で、次期地上本部総司令官に最も近いって言われてる叩き上げのベテラン」

「呼び出したのは貴様だったか」

髭に覆われた厳つい顔から放たれる剣呑な視線に見下ろされても、彼は全くたじろがない。

むしろ逆に、不敵で勝気な笑みを返してすら見せた。

「今日は君にプレゼントをあげに来たよ」

彼が差し出したのは携帯端末。自動的に空間ウィンドウが、雨をも

のともせず濡れる事もなく記録されている内容を映し出す。(ジェガン、リゼルのデータです。)

中身を進めていく内にレジアスの表情が一変するまで、さほど時間はかからなかった。

「これは・・・！」

「これが量産されれば、訓練さえ積みめば例え魔導士で無くても十分以上の戦力を大幅に増やせるようになる————戦闘機人計画の様に法に触れる事も無い」

一瞬湧き上がった驚愕と歓喜は、続けて告げられた言葉によって一気に消沈する。表情が強張るのを抑えきれなかった。

やはり、知っていたのか。だが、一体どこからそれを知った？

レジアスに加え、後ろに立つオーリスからも放たれる敵意と警戒の視線。だが彼は揺らがない。

「何が目的だ。どうしてワシにこんな物を見せた？」

「一々説明しなくなたって、大体は察しがつくんじゃないかい？」

「・・・取引か」

「その通り、君も以前起こったシャアの声明は聞いただろ？」

正直な話、2つ返事で飛びつきたいぐらいの取引だった。

だが目の前のリボンズへの疑惑が二の足を踏ませる。非合法の研究に関わっている事をどこから知り、何故こんな途方もない技術の提供を持ちかけてくるのか。

勘ぐってしまうのも無理はない。

「貴様、あの男からの回し者か？本当の狙いは一体何だというのだ」

名前を言った訳ではない。だが彼はレジアスが誰を指しているのか理解していた。

何せ実際に彼もまた、レジアスの預かり知らない所で関わり合いになっていたのだから。

レジアスの声色から彼からはよほど受けが悪いみたいね、などと苦

笑しながら返事を返す。

「別に僕がシャアやジェイルの下についてる訳じゃないよ。言ってみれば協力者って感じかな。まあ一応対等な関係のつもりだけどね」

「協力者、だと？」

まさか『あの男』は、やはり何か善からぬ事でも企んでいたというのか？

そう問い詰めたくて仕方がないが、ぐっと抑え込む。

「その点についてはそっちも加わってもらうよ。拒むなら……
・分かってるね？」

「だから、一体何を企んでいるというのだ、貴様らは……」

「そうだね、平たく言うとしたら————」

青年は一瞬、ほんの一瞬だけ彼部下と思われる者たちに視線を転じてから、正々堂々ハッキリと言い放って見せた。

「————人類の相互理解と来たるべき対話のためだよ。」

27話（後書き）

まだ話がいっぱいなので回想を書きました

28話(前書き)

26話の続きです

28話

機動六課の隊舎内にある会議室…

これからこの会議室では部隊長である八神はやて二等陸佐の召集で緊急のミーティングを開始することになった。

はやて

「えーッと…今回みんなをここに集めた理由は先日のリニアレールの際介入してきたネオジオンについてや。」

フェイト

「ええ…それに関してだけど…今回シャアは単独で、襲って来てすぐに撤退したので何が目的かわかりませんが、…リニアレール内のレリックが無くなっていました。」

なのは

「今回の目的は私たちへの牽制ってことだね。」

はやて

「そうゆうことや。まずはあのロボット…シャアについてやけど…」

リヴァイヴ

「そこからは僕が説明します。」

フェイト

「リヴァイヴ。」

リヴァイヴ

「あれは、ネオジオンが使用している第五世代特殊アーマードデバイスMSです。」

なのは

「MS？」

リヴァイヴ

「はい。魔力を持たない人間用に開発されたデバイスです。」

「「「!？」」」

リヴァイヴ

「そのデバイスの最大の特徴はリンカーコアを媒体としないで空気中の魔力を収束し魔力弾などとして攻撃できるように開発されたのです。」

はやて

「そんなデバイスの情報は聞いていない！」

リヴァイヴ

「当たり前ですこれは局上層部でもトップシークレットです！」

「「「!」?」」」

アニュー

「ヴェーダで言ったらレベル7の情報です…私たち使用者でもSレベルでの秘匿義務を課せられています。」

なのは

「それでも仲間には秘密にしちゃだめだよ！」

ティエリア

「仲間？何を言ってるんですか我々は地上本部の直轄部隊、他の部隊など仲間だとも何とも思っていない。」

「「「!」?」」」

リヴァイヴ

「ティエリア！」

ティエリア

「・・・今のは失言でした申し訳ありません。」

フェイト

【謝ったつもり無いでしょ】

ティエリア

【…当たり前だ】

はやて

「ともかくや。今から私たちは古代遺失物の回収と並行してアロウズと合同で検挙していく。いいなあ…奴はなのはちゃんにも勝るとも劣らない実力の持ち主やみんな氣い引き締めてやッ!!」

「「了解ッ!!」」

はやて

「あと、念のために単独での行動は極力控えること…では、これでミーティングは終いにするで。」

28話（後書き）

次回ホテルアグネスタの予定ですがどうなるか私にもわかりません。

ちょっとしたお知らせと茶番劇

どうもみなさん作者の観月衛です。

突然ですがこの小説をしゅ「GNメガランチャー発射!!!」no
oooooooooooooooooooo

リボنز

「嘘でも言っていることと悪いことがあるよ。」

なのは

「冗談も過ぎるとO☆H A☆N A☆S H Iだよ作者さん?」

はい・・・すいません。

リボنز

「で結局なにが言いたいんだい?」

よくぞ聞いてくれた!実は今・・・アグネスタのところでスランプ
を起こしています。

「「・・・」」

・・・「デイベイン」ちよとまって別にしばらく休止とか連載止めるとかじゃないから！！」「じゃあなに？」

リボنز

「まったくこんなのが作者とは信じたくないものだな。」

ふふふ・・・そんなことを言えるたちばかな？

リボنز

「んどうゆう意味だい？」

君の裏設定の人格は何を隠そうこの僕作者とまったく同じなのだよ！

「「「なっなんだってー！！？」」」

あれフェイトいつ来たの？

フェイト

「そんなことよりつまり作者さんの性格と同じってことは今までリボنزだったらこんな感じだろうって書いてたわけじゃなく・・・」

その通り僕の考えそのまま書いてるだけなのだよ。

なのは

「つまりこの物語は・・・」

そうともこの小説はクロスオーバーなどでは無い！

僕の思考と妄想を混ぜて書いているのだよ！

つまり君たちは僕の手で踊ってるしかないのさ！

リボンズ

「作者あああああああ！！！！」

ふはははははは僕は次々と原作ブレイクして管理局を徹底的につぶしてやる！！！！

なのは

「この小説のラスボスは作者さんだったの！？」

その通り最終回はこの僕も参戦するのさ！

「「それは無い！」」

なっなんだと!?

フェイト

「・・・そろそろおふざけは止めて本題に入ろう作者さん。」

はいフェイトさん!!

リボنز

「やけに素直だなおい！」

そんなわけで本題のお知らせです。

リボنز

「無視か！」

今後のシナリオや最終回はもう考えていますがアグネスタはMSの投入ぐらいしか介入の仕様がないので・・・

アグスタを飛ばします。

「「えっ!?!」」

リボンズ

「ここ飛ばしちゃだめだろ!何か対策を」

そんな物無い!

つまり次回は魔王降r「エクセリオンバスター!」GYaaaaa
aaaaaaa

フェイト

「なのは・・・」

なのは

「悪は滅んだなn「あめーだよ!」なっ!?!」

ふははは今の僕は思念体そんな攻撃当たらなければどうとゆうことは無い!

リボンス

「そういうことで次回は魔王降臨です。」

フェイト。

「投稿まで多少時間が掛かるとは思います。が期待せずに待っててください。ではまた会う日まで。」

ああああああオチをまだ言っていないからまだ終わらせないでええええええええ
(泣)

なのは

「そっちの方が重要なんだ。」 (――;))

29話（前書き）

投稿遅れてすいません。

それでは魔王降臨です。

29話

フェイトSide

私は急いで仕事を終わらせて訓練場に向かって走っていた。

フェイト「思った以上に仕事が長引いちゃった……！」

本当は今日の模擬戦は私が引き受けて、なのはを休ませてあげよう
と思ってたのにな……。

訓練場に着いて、空を見るとすでにスターズの模擬戦は始まっている
みたい。

フェイト「ああ、やっぱり始まってる」

ヴィータ「遅かったな、仕事か？」

シュミレーターで出来たビルの屋上でみんなと合流する。

フェイト「うん、仕事が長引いちゃって…本当は今日の模擬戦は私がやろうと思ってたんだ」

ヴィータ「そりゃ助かる…最近のなのはは頑張り過ぎてるからな」

空を見上げると模擬戦もそろそろ終盤になってきていた。けれど……

エリオ「なんだか…ティアナさんの動きがおかしくないですか？」

キャロ「よくわからないですけど……何か変なんです」

ティアナを見ると動きが鈍くキレイがない。

ヴィータ「チツ……あいつら訓練で習った事を変な風に使ってやがる」

ヴィータの舌打ちに思わず苦笑いしてしまった。

模擬戦の方はスバルがなのはに突撃している間に少し離れたビルの上からティアナが砲撃の体制をとっていた。

フェイト「ティアナが砲撃を？」

ヴィータ「いや…ありあ囃の幻術だ。本体は…：上か！」

ティアナがウイングロードを走り、なのはの頭上辺りに来た時、ティアナはクロスミラージュに魔法刃を形勢して突撃を仕掛けた！

なのは「レイジングハート…：モード・リリース」

なのはがそう呟くのと同時に辺りが爆煙に包まれた。

なのは「可笑しいな二人とも…：どうしたちゃったのかな？ 頑張ってるのはわかるけど模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

煙が晴れるとなのはがティアナの魔法刃を素手で受け止めていて血を流していた…。

ティアナ・スバル「あ…：」

なのは「練習だけと言う事聞いて、実戦でこんな無茶したら…：教導の意味が無いじゃない…：…ねえちゃんと聞ってる？…：私の教導…：私の教え方そんなに間違ってるの？」

なのはの言葉にティアナとスバルは動揺し、ティアナはなのはから離れて銃を向ける。

ティアナ「私は……私は……もう誰も傷つけたく無いから！無くしたくないから！……だから……強くなりたいんです！！」

フェイト「駄目！止めて、ティアナ！」

なのは「少し……頭を冷やそうか……クロスファイヤー……シュート」

ティアナが撃つ前になのはの一撃がティアナに放たれた。

ヴィータ「ちょ……やり過ぎだろ……」

ティアナに向けて放たれたなのはの一撃は彼女に直撃し、その爆煙でティアナ姿が見えなくなる。

エリオ「うわ……ティアナさん、大丈夫かな……」

煙が晴れていき、その姿が見え始める…。

なのは「……どうして邪魔をしたのかな……ティエリア。」

ティエリア side

（まるで、昔の僕のようにだ）

ティエリアもバリアジャケット内でなのはを睨んでいた。昔の自分を、否定した目で。だがそれをすぐにやめて、

「ティ、ティエリアさ……！」

後ろで名前を言おうとしているティアナにバズーカを向ける。もちろん撃つ気は微塵もないが、模擬戦を見ていたフェイト達も、睨んでいたなのも驚愕の顔をする。

「ティアナ・ランスター……！ 君は自分がどれだけ愚かなことをしたか、分かっているのか？」

ティアナは震えながらティエリアを見る。

「君は目先のことばかりに集中し、周りを全く見ようともしていない

い！」

「私は見えてます！！兄さんの汚名を…」

「そんなものは単なる愚かな考えにすぎない」

それがさらにティアナを感情を逆なでする。

「あなたなんかは何が分かるんですか！！」

「君の思いが分かるのかと言われれば、そんなもの他人の僕では分からない。」

「だったら！！！！」

「だが、君が行った行動はどうだ？他人どころか、自分の命も見えないあの作戦、今とろうとした行動。もし、あのまま君が撃っていたらスバル・ナカジマも危険だった。」

「！！」

ティアナは何も答えられなくなる。

「時には無茶をするのは大事だ。そうでなければ、守る者も守れない。…だが、今は無茶をする時か？」

「私は……………」

「スバル・ナカジマ！」

もう片方に持ったバズーカを今度はスバルに向ける。

「君は一番ティアナ・ランスターと近くにいながら、なぜ彼女の無茶を止めなかった？」

「わ、私はただ……ティアの、パートナーだから…」

「なら、君はティアナが無茶をしすぎて、戦闘中に死んでもいいということか？」

「それは…!！」

「違うのか？なら、君はそこで止めるべきだった。ティアナ・ランスターの行き過ぎた行動を…」

ロックオンもまた、親の仇に集中し過ぎ、無茶をして死んでしまった。それを止めることができず、ただ見ていた自分を恨んだこともティエリアには一時期あった。

だがそれを乗り越え、今ティエリアはここにいる。その過去があるからこそ、行き過ぎた無茶が何を生むか分かるのだ

「時には無茶をすることもある。だが、それで無茶をしすぎて自分が倒れるようなことになっては本末転倒。そう言うことを僕は言っている。」

「……………」

スバルは黙って話を聞いていた。どうやら分かったようだ。

「だが、それよりも僕が許せないことがある。それは、高町なのは。」

今度はすべて武装をなのはに向けて叫ぶ。

「……!!」

なのは再び先程と同じ目をして、睨む。

「正直、僕はティアナのした行為は、今言ったように、君が思っているように、間違っていたと思える。」

「ならどうして……止めただけじゃなく、私に武器を向けてるの?」

「そんなものは決まっている。」

ティエリアははっきりと言う。

「君のやり方は間違っている。」

「どこがかな? 私は、二人の教官だから……間違ってるところを正しただけだよ?」

「……僕は、君のそのやり方を認めない。どれだけのことがあろうとも、これだけは言える。今の君は、そこで間違ったことをしたスバルとティアナ以下だと」

本来こんなことはティエリアが言えたセリフではない。ティエリアは何度も自分の仲間を、自分の思うようにいかなかった、ふさわしくなかったと理由で殺そうとした。機密保持と言う名目で。

なのはのした行為は、それによく似ている。自分の教え通りにしなかった。だから撃墜した。

「君は、そんなことすら気付かないほど愚かな存在なのか？」

だからこそ、自分と同じようにだからこそ、今のティエリアがそれを見ると腹が立つのだ。

「てめえ！！さっきから言いたい放題言ってるじゃねえ！！」

観戦していたヴィータが急に大声を出した。

「おまえに、なのはの何が分かるんだ！なのはに何があったかもしらねー癖に！」

「彼女になにがあったかなど、見ていない僕が分かるはずもない」

「だったら……!!」

そこに容赦なくティエリアは言葉の剣を突き刺す。

「なら君は、今高町なのはが行った行為が本当に正しかったと言い切れるのか？」

「!!」

「言えないだろう？それが答えだ」

「けど……!!」

「いいよ、ヴィータちゃん」

なのはがまだ何か言おうとしたヴィータを止めてレイジングハートをティエリアに向ける。

「……どうやら、今の君に何を言っても無駄のようだな……今の君に教導官などふさわしくない。」

ティエリアが光に包まれる。それが消えると、両腰には2門のGNキャノンが追加され、さらに両肩と両足にはGNフィールド発生装置がある。

「いくぞ高町なのは！ティエリア・アーデ目標を破壊する！！」

その言葉と同時に全砲門を同時発射した。

リヴァイヴ side

「まったく感情的になるなんて彼らしくもない。」

僕は、現在アニュー、ブリングと共に六課内にある待機室で脳量子波で現在行われている模擬戦を鑑賞していた。

「仕方がないでしょティエリアもなのはさんに対する苛立ちやこの六課の甘さに白を切らせていたんだから。」

「たしかにね……しかしヒリングじゃないけど本当に人間は不便だね。」

「同感だな。」

「にしても、ほんとになのはさん昔のティエリアみたいね。」

「・・・アレは、同僚が死ぬかしなければ変わらない。それに今回ティエリアは負けるだろうな。」

「…ですね……それともう一つわかったことがありますよ。」

「「??:?」」

「・・・このままだと…彼女…高町なのは……イノベーターにはなれない。」

29話（後書き）

そこそこがんばって書きました。

次回の投稿日は未定です。

30話(前書き)

なのはとティエリアのバトルです。

30話

ティエリア side

最初の一撃で、正面にあった廃ビルが消滅した。

ティエリア最初の一撃を放ったあとは強力な砲撃を行わず、それぞれの武装をタイミングをずらして交互に砲撃を行っている。

（速いな、全く当たらない）

砲撃は何度か当たりかけたがそのたび避けられ、あるいは防御され、直接的なダメージは与えられていない。

（かといって、チャージ攻撃をすれば隙が生まれる）

そう、故にこういう戦い方をすることしかない。

「デイベイン・シューター!!」

「ぐ、GNフィールド」

なのはの誘導型魔力弾を強化されたGNフィールドで防ぐ、この繰り返した。

「デイベイン・バスター！」

カートリッジを3発ロードして砲撃放つのは。

「ぐ、ぐああああ」

さすがにその攻撃には耐えられずGNフィールドを纏ったまま押され壁に激突する

「やはり、強い」

今まで見てきた戦闘でもまったく無駄のない卓越した動きと砲撃のタイムラグのなさで機動力。

ティエリアが勝てるのは防御と攻撃力くらいものだ。

「これが、エースオブエースの力か」

GNバズーカ？は先ほどの衝撃で壊れてしまい、GNフィールドも強化されたおかげで何とかカートリッジを
使われても防げるが、勝負は圧倒的になのはが有利である。

ティエリアはGNフィールド張り攻撃を防御しながらなのはに近づく。

「これで終わり。ティエリアも、少し、頭冷やそうよ」

なのはは、カートリッジを3発ロードする。それを止めようとティエリア攻撃をしようとするが、誘導型魔力弾を使われ、隙を作らせない。

「ディバイン…」

そしてなのはは、とどめとしてティエリアの両腕と両膝をバインドで止める。両膝に関してはGNキャノンごと封じる。

「くっ!!」

これに関してはティエリアは予想外だった。

「バスター!!!」

（くっセカンドとトライアルシステムさえ使えば!!!）

なのはは、最初は冷静な判断もできていなかったのでティエリアは勝利を確信していたが

なのはの放ったカートリッジで強化されたディバイン・バスターがティエリアに一直線で向かう。

「くっ!!!」

バインドによって動きを封じられ、武器に関してはGNバズーカではなく、膝のキャノンは使えず合計4つの武器がない状態。

「圧縮粒子、解放!!!」

しかし黙って攻撃を受けるティエリアではない。前面にGNフィールドを張り、残った肩と腰のGNキャノンを使い砲撃を集中させる。

「ぐ、ぐううう!!」

2つの砲撃は均衡を保たず、少しずつティエリアが押されていく。そこにダメ押しとばかり、なのはがさらにカートリッジをロードする。これにより5発、ティエリアが放った砲撃を吹き飛ばす。

「GNフィールド!」

展開されたGNフィールドに止まるが、すぐにそれを突き抜けて命中する。

「ぐあああああ!!!!」

爆煙がティエリアの周りを覆う。それが晴れたとき、皆が見たのは落下していくティエリアだった。

リボンスide

アッチャー負けたか。

まあセカンドモードじゃないから負けて当然か。

しかしなゝまだ変革してないのに恐ろしい強さだな。

さすがは魔王（――；）

……………ん！？よく考えたら管理局つぶしても、カタロンみたいなのは筆頭に残存勢力で攻めてくるんじゃないか？

「……………どうしよう」

戦意損失させるために何か考えないとな。

30話（後書き）

今回はティエリアが負けました。

勝つと思ったみなさんすいません。

31話（前書き）

更新遅くなってすみません現在新しいのはの小説を制作中なので
今後も投稿が遅れるかもしれません。

そして今回短いです。

この前PVを確認したら

PV..222',222アクセス

ユニーク..32',936人

とまさかのPVがぞろ目になっていました。

31話

模擬戦後

ティアナは疲れが出て眠り、起きた後はなのはが自分の過去を皆に教えた。

ただの小学生だったなのはが魔法にかかわり、ロストログアを集めるため戦ったこと。

その際、なのはとフェイトが昔、フェイトの親の関係で2人が戦うことになったこと。

闇の書事件と言われる事件で、当時はまだ安全性がなかったカートリッジシステムを使っていたこと。

どんどん無茶をし8年前、任務中に謎の敵の襲撃をうけ、死にそうになったこと。

そんな悲劇を他の人にも味わってほしくないからこそ、無理をしない、基礎中心の訓練をしていたこと。

過去を話していたのをティエリア達イノベイドは少し離れた壁にもたれて聞いていた。

【これでは単なる集団精神操作行ってるようですね。】

【まったくだ。自分を悲劇のヒロインと勘違いしている。】

【こうやって同情を集めて自分の言いなりにするってわけですか】

【そろそろ離れた方がですねここから】

【それはリボンズからの帰投命令が来るまで行動できませんね。】

【そうだね最高のフィナーレにするには、まだ行動を起こす時期じゃないからね。】

リボンスide

よしこの手で行こう!!

あっ突然叫んですいません。

局を潰した後の対策ですが素晴らしい考えを思いつきました。

この世界が並行世界だとうことを忘れてました。ならイノベイターと対話を行った彼らが存在するはずです。

恒久和平実現のために彼らをここへ招待しようじゃないか

ふふはっはっはっはっはっはっはっはっは

32話(前書き)

いよいよヴィヴィオが・・・出るのか？

32話

リボンス side

どうもこんにちは、今日はヴィヴィオが搬入される日ですよ。

ここは何も介入する気無かったんですが、どうやら脳みそ共がヴィオにイノベイドのデータを使って魔改造したようです。

まったく余計なことを・・・

だがイノベイド化したヴィヴィオを高町なのはに任せるのはさすがにマズイ下手したらきっかけをつかむ可能性もある。

「・・・ここは、僕が出るしかないか。」

「何をしてるんだい？リボンス。」

リジェネはそう言うとりボンスが見ている情報を見始めた。

「・・・へ〜でどうするつもりだい？」

「今回は僕のデバイスの性能実験もかねて僕が出撃するよ。」

「護衛はどうするんだい？」

「いや必要ないよ今回はヴィヴィオの回収だけだから。」

「レリックは良いのかい？」

「それこそ六課奇襲の際に奪えばいい。」

「そうかいじゃまあ気おつけなよ。」

「わかってるさ。」

六課

模擬戦の一件から数日後、今日もフォワード四人は訓練に励んでいた。実戦形式で教えていたのだが、日に日に皆の動きは格段に良くなっていった。特にティアナの伸びがいい。

そして、朝の訓練が終わり、なのははフォワード達を一同に集める。

なのは「はい！今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

フォワード陣「」「は、はい！」「」

なのは「でね？実は何気に今日の模擬戦が、第二段階クリアの見極めテストだったんだけど…。」

なのははそう言いながら、フェイト、ヴィータを見て合否を聞く。

フェイト「合格！」

スバル・ティアナ「「はやっ！」」

フェイトの即答にスバルとティアナが突っ込んだ。

ヴィータ「ま、こんだけミツチリやって問題あるなら大変だってことだ。」

なのは「うん、私もみんないい線いってると思うし、じゃあこれにて第二段階終了!」

なのはがそう言うのと、フォワード四人は顔を見合わせ喜ぶ。

フェイト「デバイスリミッターも一段階解除するから、後でシャリーの所に行ってきたね。」

ヴィータ「明日っからは、セカンドモードを基本にして訓練するかな。」

フェイトとヴィータの言葉を聞き、キャロが疑問を口にする。

キャロ「え? 明日?」

ヴィータ「ああ、訓練再開は明日からだ。」

フォワード四人は不思議な顔をする。

なのは「今日は私達も隊舎で待機する予定だし。」

フェイト「みんな、入隊日からずっと訓練漬けだったからね。」

なのは「つまりお休みだったこと。」

フェイト「だから、町にでも出かけて遊んでくるといいよ。」

それを聞いた四人は、やっとなのは達の言ったことを理解し、顔を綻ばせ笑い、返事をする。

フォワード四人「」「はい！」「」

そして朝の訓練を終え、なのは達は食堂で朝食を食べていた。食堂ではテレビからニュースが流れている。

レポーター「続いて、政治経済です。昨日、ミッドチルダ管理局地上本部において、来年度の予算会議が行われました。三度目となる再申請の税政問題について、各世界の注目が集まっています。」

ニュースでは、管理局の予算についてが放送されていた。

レポーター「当日は首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中将による管理局の防衛思想に関しての表明も行われました。」

レジアス・ゲイズという名前が出た途端、皆がモニターに注目した。

レジアス「魔法と技術の進歩と進化、素晴らしいものではあるがしかし！それ故に我々を襲う、危機や災害も10年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している！兵器運用の強化は進化する世界を守る為のものである！」

レジアス「首都防衛の手は未だ足りん。地上戦略においても、我々の要請が通りさえすれば、地上の犯罪発生率も20%、検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことが出来る！」

レジアスの演説が終わると、皆食事を再開する。

ヴィータ「…このオッサンはまだこんなこと言ってるのな。」

ヴィータは呆れながらレジアスを批判する。

シグナム「レジアス中將は、古くからの武闘派だからな。」

シグナムはミッドチルダ首都航空隊第14部隊副隊長なので、レジアスとは面識があり、レジアスの性格をある程度分かっているので、コーヒーを飲みながら淡々とレジアスを評価する。

なのは「…あ、ミゼット提督…。」

なのはがモニターに映っている人物を見て、呟いた。

ヴィータ「え？ミゼットばーちゃん？」

ヴィータはミゼットの名前に反応し、モニターを見る。レジアスの右後ろに、三人の人物が座っている。

本局幕議長 ミゼット・クローベル

武装隊栄誉元帥 ラルゴ・キール

法務顧問相談役 レオーネ・フィルスである。

フェイト「あ、キール元帥とフィルス相談役もご一緒なんだ。」

はやて「伝説の三提督揃い踏みやね。」

そんな会話をしていると、ヴィータが言う。

ヴィータ「でもこうして見ると…、普通の老人会だ。」

フェイト「もう、駄目だよヴィータ。偉大な方達なんだよ?」

なのは「うん、管理局の黎明期から今の形まで整えた功労者さん達だもんね。」

ヴィータ「まああたしは、好きだぞ、このばあちゃん達。」

そんな感じの会話で朝食は終わった。

その頃、一人の少女が下水道内でゆっくりと歩いていた。
足にはレリックのケースが鎖で繋がっていた。

32話(後書き)

・・・ヴィヴィオちょっとしか出せなかったorz

次回に続きます。

33話(前書き)

前回の続きです。

33話

リボنزside

「この辺りのはずだが・・・」

現在地下水道にいる。

大体の場所は把握しているが、結構広いので見つけにくい。

「・・・ここは、あの手でいくか。」

そう言うとりボنزは意識を集中させた。そして彼の目は金色に光っていた。

アニューが潜入していた時に行った脳量子波による意識の共有だ。

「・・・ん？意外に近い？・・・その角か。」

そこまで歩くとそこにはぼろぼろの服を着たヴィヴィオがいた。

「見つけたよ。」

「大丈夫かい？」

「…誰？」

「僕はリボンス君は？」

「…ヴィヴィオ」

「そうか、ヴィヴィオ僕と一緒に行くかい？」

「…うん」

聖王の遺伝子を使ってるとはいえ、やはりイノベイドだ本能的に仲間だと認識しているのか・・・

「じゃあ少し待ってくれるかい？」

「…うん」

「いい子だねヴィヴィオは。」

そう言うとりボンスは優しくヴィヴィオの頭を撫でた。

「あっ」

「ん？ いやだったかい？」

「うん暖かくて優しい感じがする・・・気持ちいい」

そう言うヴィヴィオはリボンスの足にしがみついた。どうやらなついたようだ。

そんなことを考えながらリボンスは通信画面を開きスカリエッティと連絡を取る。

『やありボンスどうしたんだい？…！その子は…』

「ああ察しの通りさ。この子はこっちで保護するからレリックを頼みたいんだ。」

『それはもちろん構わないがそこにレリックは一つしか無いのかい？』

「ああ一つだけだよ。」

『ふむ：ではもう一つの方の散策をガジェットにさせて回収は娘たちに頼むでしょうか。』

「わかった僕も今暇を持て余していたからね牽制ぐらいはさせてもらうよ。」

『それは助かるね。じゃあ君はクワットロ達と合流してくれるかい。』

「ああ構わないよ・・・そろそろ引越しの準備は終わったかい？」

『もうすぐ終わる・・・それが終わったら準備完了・・・祭りの始まりになるのかな？』

「・・・たしかに次には変革と言う祭りの始まりだね。」

その言葉を最後に通信が切れる。

「・・・」

そして通信後リボンはヴィヴィオが言った言葉を少し考えていた。

（優しい・・・か・・・こんな自分勝手な僕が優しいか・・・この子の未来のためにも争いの元を自作自演で起こしているこんな腐った世界は正さなないといけない。）

「すうーすうー」

「ん？」

いつの間にかヴィヴィオが眠っているどうやらここまでの疲れと安心感で眠ってしまったようだ。

「・・・困ったな…そうだ。」

再び通信画面を開くりボンス

『はいはいみんなのアイドル、アリシアちゃんだよ。』

「アリシア少しここまで来てくれないかい？」

『突っ込みも無くスルーですか（へ―へ；）まあいいや・・・その子が？』

「ああこの子連れてってくれるかい？僕は少し六課の人間と遊んであげようと思ってね。」

『わかったよじゃあ少し待っててくれる。すぐ行くから。』

「ああ。」

そして通信が終ったリボンズは何で出撃するか考えた。

（あいつらが相手だがガンダムを出すわけにはいかないし・・・ここは牽制と警告をかねてレグナントで出撃するか・・・はっきり言
ってAMGNアンチマジックフィールドを試したいしな）

その頃六課では隊舎に警報が鳴り響いていた。

「八神部隊長！旧市街地の地下下水道と上空にガジェットが出現しました！」

「なんやて！」

「ガジェットが地下下水道に出たってことは地下下水道にレリックがあるってこと？」

「その可能性は高いね。」

「ほんならフォワードの子たちに直ちに連絡して現地に直行してもらう。フェイト隊長となのは隊長は直ちに出击。今回はアロウズは地上本部に行ってるから増援はできないけどみんながんばろな！」

「「「「「了解」」」」」

その頃地上本部の控え室では・・・

「今回はリボンス自ら出撃するらしいですよ。」

「別に彼が出なくても・・・」

「今回は彼の遊びらしいから特には何もしないだろう。」

そんな会話をしているとリボンスからの脳量子波によるメッセージがきた。

「レグナントの使用とAMGNフィールドの試験実験。」

「つてことはもうすぐセカンドの使用許可が出るのかな？」

「計画発動まで後一か月だからな。」

「・・・失敗は許されない。」

「わかってます。そのためにここに来たんですから

作戦名、L a w T o w e r R e b e l l i o n

法の塔の反乱の打ち合わせに・・・」

34話(前書き)

続きです

34話

はやてside

機動六課管制室ではやて達は黙々と周辺捜査を行っていた。すると、地下水路から反応を感知し、モニターに映すとガジェットがいた。

「…！ガジェット、来ました！」

「地下水路に数機ずつのグループで総数16…20！」

「海上方面に12機単位が5グループ！」

シャーリー達の報告に、はやては顎に手を当て考える。

「…多いな…。」

「どうします？」

「∴そやなあ∴。」

グリフィスの問いにどうするか考えているところに通信が入る。すると、モニターにヴィータが映った。

『スターズ2からロングアーチ、こちらスターズ2！海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた！今現場に向かっている。それからもう一人。』

『108部隊、ギンガ・ナカジマです！』

はやてとグリフィスは、ギンガの登場に驚く。

『別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

「うん！お願いや！」

はやては皆に連絡を入れる。

「ほんなら、ヴィータはリインと合流。協力して海上の南西方向を

制圧！」

『南西方向了解です！』

「なのは隊長とアイン、フェイト隊長は北西部から！」

なのは・フェイト・アイン 『『了解！』』』

なのは達は同時に返事をする。

ルーテシア side

その頃、町の中にあるビルの屋上、避雷針の上に一人の少女、ルーテシア・アルピーノが佇んでいた。そして、紫色の長い髪をなびかせながら、目を閉じていた。そのルーテシアの前にモニターが展開し、ナンバーズ4、クワットロが映し出された。

『ケースの一つとマテリアルは既に確保しましたので私たちは邪魔

』
者の排除にあたります。お嬢様は地下のほうをお願いしますね。

ルーテシアは無言で目を開ける。それを了承だと取ったクワットロは話を進める。

『騎士ゼストとアギトちゃんはどうしたんですか？』

「…別行動…。」

『と言うことは、お一人ですか？』

「一人じゃない。」

いつの間にか、ルーテシアの隣には黒い人型の何かがいた。

「私にはガリユーがいる。」

『それは失礼しました。協力が必要でしたらお申し付けください。それではルーお嬢様？ よろしくお願いします。』

「うん。」

そして、クワットロが映ったモニターは消えた。ルーテシアはガリユーに話しかける。

「行こうか、ガリユー。探し物を見つけるために…。」

そう言い終わると、ルーテシアの足下にベルカの魔法陣が展開され、ルーテシアとガリユーはその場からいなくなった。

クアットロ side

「それではルーお嬢様〜？ よろしく願いします〜」

ルーお嬢様が小さく頷いたのを見て私はそのまま念話を切る。

地下水路に落ちたレリックはお嬢様に任せるとして私たちはドクターに言われた通りに六課への牽制と新装備のテストを開始しますね〜それにしてもドクターもリボンズさんも酷い人たちですね〜その気になればいつでも六課の人間を殺せるのに〜最後の最後で希望を与えてから絶望に叩き落とすからまだ倒さないなんて〜まあわたし

的にはそうゆうの大好きだから良いんですけど」

「クアットロ、方針としては僕たちはなにをするんだい？」

「……」

新装備実験と牽制の為に手伝ってくれるリボンズさんとディエチちゃんが私の指示を待つ。

「とりあえずはガジェットたちがレリックを求めて市街地に向かってくると思いますのでその混乱に乗じて敵のヘリをスローネを元にドクターが開発したGNランチャー？で撃墜その後来るであろう六課のエース・オブ・エースとフェイトお嬢様をリボンズさんのレグナントで相手をしてもらいますね」もちろんAMGNフィールドは使用してくださいよ」今回のデータによっては私たちに装備される予定ですから」。

「了解」

「……うん」

スバル side

休暇を楽しんでいた私たちはガジェットがこちらに向かってきていることを聞いた私たちは地下からやってくるガジェットを殲滅するために隊長副隊長なしの四人だけで地下に突入することになった。とは言っても後からギン姉が来るって聞いているから合わせて五人になる。

「ギンガさん、お久しぶりです！」

『うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょ？ 従うから指示をくれるかな？』

「はい」

ギン姉との念話での打ち合わせにティアナは少しだけ考えるとすぐに合流地点を導き出した。

「ひとまず南西のF94区画を目指してください。途中で合流しましょう」

『F94……了解!』

確認するような間があつてからすぐに返事を聞いてティアナは念話を切った。

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね?」

「あ、うん。そうだよ、私のシューティングアーツの先生で年も階級も二つ上」

「ほえ」

前にエリオとキャロにはギン姉のことを少しかた話す機会があつたからギン姉の名前が出てきて反応を見せてくれたけどシューティングアーツの先生とか階級が二つ上とかまでは話してなかった影響かキャロも驚いたような顔をしていた。

「ギンガさん、デバイス特定の相互位置把握と独立通信ができます。準備いいでしょうか?」

私達が話しながらもギン姉と少しでも早く合流できるように合流地点へと急いだ。

フ ェ イ ト s i d e

突然増えたガジェットたちに驚きを隠せずにいたが私たちは慌てることなく確実に落としていく……が。

「幻影と実機の構成編隊!？」

何体かのガジェットは魔力弾にあたった瞬間消滅してしまった。

きつとクワットロの仕業だろう。

ガジェット達から放たれる攻撃をなのは冷静に防ぎながら状況の整理をする。

「防衛ラインを割られない自信はあるけど……ちょっとキリがないね」

幻影が混じっていることを知ったとはいえ未だに区別のつかない状態でそれらを市街地にまで入れることは許されない。

「これだけ派手な引き付けをするってことは……」

「地下かヘリの方に主力が向かっている……ってことだね」

今回は同類とレリックを手に入れる為の陽動と聞いているがクワツトロのことだからフォワードのみんなやヘリが危険に晒されているってことになる。

「なのは、ここは私が抑えるからアインと一緒に」

「テストロッサ!？」

アインが驚いたような声を上げるけど恐らくこれが今出せる最善の策だ。

「コンビも普通に空戦してたんじゃない時間がかかりすぎる——限定解除すれば広域殲滅でまとめて落とせる」

「それは……そうだけど……」

「なんだか嫌な予感がするんだ」

もちろん確証なんてないし、何もないに越したことはない。

「でも、フェイトちゃん……」

なのはがまだ何か言おうとしていたから強く言おうとすると突然はやての念話が割り込んできた。

『割り込み失礼。ロングアーチからライトニング1へ。その案も、限定解除申請も部隊長権限にて却下します』

「はやて!?!」

「はやてちゃん!?! 　なんで騎士甲冑!?!」

はやての姿はいつもの機動六課の制服ではなく戦線に出る時に纏う
バリアジャケット
騎士甲冑だった。

『嫌な予感も私も同じでな、クロノ君から私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ……ちゅーことで、なのはちゃん、フェイトちゃん、アインは地上に向かってヘリの護衛。ヴィータとリインはフォワード陣と合流。ケースの確保を手伝ってな』

さすがははやてだ。

まとまりきらなかった作戦を一気にまとめてそれぞれの的確な指示を出していく。

（ほんともうすぐ敵になると思うと名残おしいよ。）

私達ははやてに感謝しながら急いでそれぞれ指示された場所へと向かった。

その頃地上本部レジアス・ゲイツ中将の控え室では・・・

リジェネ side

今回のクーデターの会議には僕も参加するよう言われたはつきり言

ってめんどくさい。

けどこれもあのクス共の消し去るためにもやらなければならないので参加している。

取りあえず監視カメラの映像はヴェーダを中継させているのでこの部屋はレジアスしかないように映ってるから情報の漏れはまずない。現在は原作のゆりかご浮上の計画まで話した。

「ここからが本題になります。このゆりかご浮上の混乱を利用してクーデター軍は所定位置に移動レジアス中将は脳みその始末後ドゥーエ、ゼストさんアギトと共にここから離脱してもらいこちらの本拠地に移動してもらいます。」

「此処から離脱するだど？なにをするつもりだ？」

「いえ、ここは今後の政府のために必要ですからあくまで用心のためです。」

「本局の・・・いや奴らのことだ地上本部が占拠されたと知れば本部ごと潰しにくるだろう。」

ティエリアが確信をついたように言う。

「そんなばかなこと・・・いや海の連中の裏は知っている。・・・可能性は高いな。」

「続きます。その後ゆりかごが破壊され勝利に浸っているところでスカリエッティ達を回収、我々の兵器およびMS、MAで軌道上の次元航行船を破壊、クーデター軍とネオ・ジオンにより地上部隊および地上本部を制圧、管理局に無条件降伏を勧告します。」

「降伏しない場合は？」

「・・・武力制圧します。」

「・・・わかってはいたが納得のいかん物だな。」

「それは仕方がないです。奴らには今までやってきたことと同じ目に合ってもらわないと。」

「・・・わかった。」

「おとりに開発しているアインヘリアルと本命のリゼルとジェガンの製造は？」

「どちらもすでに八割完成している。作戦開始までには間に合う。」

「ではこちら方ですが今回の作戦用のMS、MAは予備も含めて予

定数完成しましたが、今後を考えて現在1万機ほど生産中です。」

「!?!? そんなにか!」

「今後の世界と人間のためにも必要になってきますからね。」

その言葉を最後に会議は終了した。

34話（後書き）

次回こそ戦闘を書きたい

そしてまた投稿いつになるかわからない。

35話(前書き)

今のところは本編に沿って進めようと思います。

35話

クアットロ side

「ディエチちゃん、ちゅんと見えてる？」

ディエチは、自分より大きい布で包まれた長い物体を抱え、一点を見つめていた。

「ああ、障害物もないし、空気も澄んでる。…よく見える…。」

ディエチは左目の望遠機能を使い、遥か彼方のへりを捉えていた。

「でも本当にいいの？クアットロ、撃っちゃって？確かにドクターやりボンスは撃って良いと言ったけど、計画に支障がでることになる。」

ディエチはクアットロに聞く。すると、クアットロは笑いながら言った。

「うふふ、ドクターとリボンスさん曰わく、あのエース・オブ・エースなら無暗に仲間を見殺しにするはずないから大丈夫だそうよ？」

「ふーん。ところでそのリボンスは？」

「すでに所定位置に移動していつでも動ける状態よ。」

「そう。」

ディエチはクアットロに興味無さそうに返事を返す。そしてディエチは、長い物体の布を取り、自分のマントも脱いだ。

それを眺めているクアットロの所にモニターが現れ、ウーノが映し出された。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ。』

「ああ、そういうば、例のチビ騎士に捕まってましたね。」

『今はセインが様子を伺っているけど…。』

「フォローします?」

『お願い。』

そして通信が切れた。クアットロはナンバーズ6、セインに念話で話す。

〈セインちゃん?〉

〈あいよ、クア姉。〉

〈こっちから指示を出すわ。お姉様の言う通りに動いてね?〉

〈ん、了解。〉

クアットロ side out

ルーテシア side

現在ルーテシアとアギトは、バインドで捕縛されて大人しくしている。ルーテシアの周りには、ヴィータ、リイン、スバル達フォワード陣とギンガがいた。

ヴィータはルーテシアに対して、逮捕時のお決まりの口上を言っているが、ルーテシアは目を閉じながら聞き流していた。そこに、クアットロから念話が届く。

へはぁーい、ルーお嬢様？

ルーテシアは目を開き、少し驚いた顔をする。

へ…クアットロ？

へ何やらピンチのようで、お邪魔でなければクアットロがお手伝

い致します。〈

へ…お願い。〈

ルーテシアの返事を聞いたクアットロは、黒い笑みを浮かべる。

へはい、ではお嬢様？クアットロの言う通りの言葉を、その赤い騎士に…。〈

ルーテシアはそう言われ、ヴィータを見た。

六課 side

機動六課管制室にアラートが響く。

「市街地にエネルギー反応…！…大きい…！」

「そんな…、まさか!？」

「砲撃のチャージ確認！」

「物理破壊型！推定Sランク！」

その報告に、なのは達は驚いた。

「GNランチャー高濃度圧縮粒子充填」

砲撃の準備をするディエチの横で、クアットロはニヤニヤと笑いながら、ルーテシアに念話で指示を出していた。

〈逮捕はいいけど。〉

ルーテシアはクアットロの言葉に続く。

「…逮捕は…いいけど…。」

突然口を開いたルーテシアに、ヴィータ達は少し驚く。そして、言葉の意味を探る。

「…大事なヘリは…放っておいていいの…?」

ルーテシアの言葉を聞き、ヴィータ達は騒然とする。

「チャージまであと12…10。」

デイエチは淡々とカウントする。その横でクアットロはニヤついたまま、ルーテシアに念話で伝える。

へああ、お嬢様く? もう一言追加いいですかく? へ

「…ん。」

ルーテシアは小さく頷いた。ヴィータはそれに反応し、顔をしかめる。

へあなたはまた…。◇

ルーテシアはクアットロに言われた言葉を復唱する。

「…あなたはまた…守れないかもね…。」

それを聞いたヴィータは目の色を変える。

ヴィータside

ヴィータは慌ててヘリのほうを見る。

「GNメガランチャー発射！」

そして、オレンジ色の高出力の砲撃がヘリに向かって放たれた。皆、それを眺めることしか出来なかった。

皆がヘリのほうに気が向いていると、エリオの足下からセインが出てきた。

「うわ!？」

「いただき！」

セインはエリオからレリックボックスを奪い、地面に潜っていった。ティアナはセインの沈んだ場所を撃つが、ただ地面に当たるだけだった。

「くそ！」

ヴィータはセインを追いかけるべく、ルーテシアから離れる。ティアナもヴィータに続く。

ルーテシアの周りには誰もいなくなった。そんなルーテシアに念話が届く。

へルーお嬢様ー？ナンバーズ6番、セインです。私のIS、デーパーダイバーでお助けします！フィールドとバリアをオフにしてじっとしててくださいね

へわかった。

ルーテシアは目を閉じてじっと佇む。すると、ルーテシアの前の地面からセインが出てきて、ルーテシアを抱きかかえ、地面に潜る。ヴィータとティアナは離れていた為、反応出来ず、見送った。その隙にアギトも逃げた。

「反応…ロストです…。」

「くそ！…ロングアーチ…ヘリは無事か？…あいつら墜ちてないよな！」

クワットロside

「あらゝもしかして間に合わなかったのかしら？」

ヘリのすぐそばで発生している硝煙を見たクワットロが言った。

望遠カメラで着弾を確認中のディエチがクワットロに言った。

「黙って。今確認中・・・まだ飛んでる・・・」

「あら？もしかしてドクター達の予想道理になったのかしら？」

「・・・そうみたいだよ。ヘリの側面に高町なのはを確認・・・あの砲撃を防ぐなんてマジ！？」

「でもゝ出力50%ゝ60%でしょ？」

「・・・当たり。正確には56.87%最大出力にも満たない。それにフルチャージするなら一分ぐらいはかかる。」

そんなことを話していると通信がした。

『そんなことは今は良い…来るぞ!』

リボنزの通信後上空から無数の魔力弾が飛来した。

「くっ!」

二人はすぐさま回避し別のビルに移る。

「見つけたへ久しぶりだねディエチ、クワットロ今回は武器の性能実験?」

「こっちも!?へお久しぶりですね〜フェイトお嬢様〜まあそんな感じですね〜」

「速い!へお久しぶりです。これから撤退しますので詳しいことはのちほど」

会話と念話を同時にしながら二人は予定どおり捕まるのを避ける為に追い詰めてきたフェイト・テストロッサから距離を置きながら離脱することにした。

当然、彼女はそれを許さずにそのまま追いかける。

「止まりなさい！ 市街地での危険魔法使用、および殺人未遂の現行犯で逮捕します！ へどうやって離脱するの？」

「今日は遠慮しときます」へそれはこれからわかります」そうゆうわけでお願いします」

その言葉を言った後にフェイトに強力な粒子ビームが向かって来た。

「!？」

フェイトはそれをかろうじて避けクワットロ達を見たが居ない。

おそらくISで逃げたのだろう。

そしてフェイトは粒子ビームの発射された方向を見た。

そこにはレグナントがGN粒子を放出しながら空中に待機していた。

（レグナント!？でもいったい誰が？）

【ふふふ久しぶりだねフェイト。】

【!？リボンス！】

【せっかくなんだ。六課と君の力、見極めさせてもらおうよ】

そしてリボنزVS六課の戦闘が開始された。

35話（後書き）

次回はちょっと息抜きに番外編を書こうと思います。

番外編 PV293, 373アクセス ユニーク42, 484人 &お気にす

今回は本編と関係ないです。

リボنزが休暇を取って出かけていた時の話です。

始まりはこんな会話からだった。

「ちょっと用があるから出かける2日ぐらいはいないから後を頼むよ。」

「ねえー思ったんだけどリボンスって年に2回ぐらい行先も伝えな
いで出かけるよね。」

「確かにそうね」

「ちょっと気になるな」

そんなことを話しているのはソレスタルビーイング内にいるリジェ
ネ、ヒリング、アリシアだ。

「ねえ！どうせなら尾行して何所行ってるか探ってみない？」

「…面白そうだね。」

「あたしも賛成！」

「よし！じゃあ決まりどうせならフェイトも呼ぼう。」

そんな感じでリボンス追跡大作戦は開始されたのである。

一方リボンスは……

「ん？何か嫌な予感がしたな…まあいいかそれより早く行かないと。」

そしてリジェネ達は、フェイトと合流し追跡のために黒いスーツとサングラスをかけてリボنزの転送先を調べていた。

「どうだった？」

「うん。行先は・・・第97管理外世界・・・地球だね。」

「地球？今更何かやり残しがあるとも思えないけどね・・・」

「後転送位置が海鳴じゃ無いみたいなんだ。」

「????？ますますわかんないわね。あそこ以外に行くとこあんの？」

「ちょっと待って今足取りを追って転送座標を確認して地球の座標と照らし合わせてるから。」

そう言うのとフェイトは素早くキーボードで打ち込み始めた。

「案外東京の秋葉に行ってたっりしてるんじゃないかな？」

「はははまさか」「わかったよなんか東京ってところみたい。」・
・
」

「・・・冗談のつもりだったんだけどな・・・」

「まさかと思うけど・・・」「東京の文京区ってところみたいだよ。
文京区？」

「確かあそこって東京ドームぐらいしかなかったよね？」

「ああ。なんでアリシアが知ってるかは聞かないけど・・・そこに
何の用が？」

「まあ行ってみればわかるでしょ！」

「それもそうだね。」

「それじゃあレッツゴー！」

その頃東京文京区の水道橋では、

「ついに東京ドーム公演だな。」

「ああ発表された時はうれしかったよ。」

「11月23日に発売したアルバムは購入した？」

「モチ。初回盤買ったよ。DVD見た？メツチャよかったよ。」

などの話をしている人たちが続々と東京ドームに集まり始めていた。

番外編 PV293, 373アクセス ユニーク42, 484人 &お気に

察しの良い方はもうわかると思います。

わからない方は12月3日もしくは4日がヒントです。

作者も行きます。楽しみですね！

36話(前書き)

番外編の続きは12月ごろ書こうと思います。

戦闘描写下手なので短いです。

すいません。

36話

レグナントがGN量子を放出し速度を上げてフェイトに接近してくる。

「くっ！プラズマランサー」

<plasma lancer>

距離を取らないといけないと判断しフェイト後ろにさがりながら弾幕を張るためプラズマランサーを打つ

「無駄だよ！」

だがリボنزはAMGNフィールドを展開し全弾無効化する。

「なら！接近戦に！」

<ハーケンフォーム>

バルディッシュがハーケンフォームになりフェイトは接近しようとするだが。

「捕えた！当たれ！」

レグナントの前面の部分が開き湾曲粒子ビーム砲が発射される。

「なっ！？この砲撃」

フェイトはかろうじて回避をするが・・・ビームが曲がり再びフェイトに向かって来た。

「っ！やられる」

フェイトは直撃を覚悟したが。

「やれせない！ダイバーーーーン」

<D i v i n e b a s t a r d>

「バスターー！」

なのはがフェイトの救援に入りディバインバスターでビームを相殺させる。

「フェイトちゃん大丈夫。」

「大丈夫。ありがとなのは。」

・
フェイトを庇ったなのは再び杖をレグナントに向けようとするが・

『なのはちゃん、フェイトちゃん広域空間攻撃いくで!』

はやてからの連絡が届きフェイトとなのはは空域から離脱する。

「ん?」

リボンスは上空にできた黒い球体の歪みを見た。

「広域空間攻撃か・・・無駄なことを・・・」

「遠き地にて、闇に沈め・・・デアボリックエミッション!」

はやての詠唱が終わりデアボリックエミッションがレグナントに向けて放たれた。

だがレグナントは自ら攻撃を受けるかようにAMGNフィールドを展開し前進した。

そしてデアボリックエミッションとAMGNフィールドが接触したがデアボリックエミッションがAMGNフィールド前に耐えられずに消滅した。

「「「なっ!?!」」」

3人とも驚きを隠せない。それもそうだ限定解除しシングルスとなったはやての広域空間攻撃が一瞬で消された。魔導士にとってそれはもはや『魔法は通じない』と言われたような物と同じだ。

そんな考えをしている間にレグナントは3人に接近し左のアームからワイヤーにつながれた突起のエグナーウィップようなものを出す。

「「「!?!」」」

それを見た3人は、すぐに防御魔法を展開したが、

突起は、3人の防御魔法の内部にねじ込まれるように入っていく、
その中から新たなワイヤーが出てきての3人を囲むように広がり、
同時に電撃を与えた。

「「「きやあああああああああああああ!!!!!!」」」

電撃を受けた3人は気絶し重力に引っ張られて地上に落ちていく。

「やはりな……くだらない正義感と魔法に頼った人間たちの力はこの
程度か……」

2人（なのは、はやて）を見下したりボンズは撤退を開始する。

フェイトはかろうじて意識を保ちリボンズの言葉を聞いていた

（やっぱり今の管理局じゃいけない。誰かが悪役を演じ無ければ変
わらない世界なんて……）

フェイトは改めて決心した。

親友達を裏切る決心を
・
・
・

再びアンケート フェイトとアリシアの機体どうしよう

どうもみなさん作者の観月 衛です。

最終決戦に向けてのアンケートを取りたいと思います。

今回のお題はタイトルにある通りフェイトとアリシアの機体をどうするかです。

無難にスサノオがいいかな〜とも思っただんですが、何か違和感バリバリありそうで今迷ってる状態です。

いつそのことオリガンでも書いてそれにしようかな〜・・・なども考えています。

そうゆうわけで選択しだします。同じ選択しても2つ選んでください。もちろんアリシアが乗る機体、フェイトが乗る機体と分けてアンケートください。

1 スサノオ (双剣から)

2 アルケー (大剣から)

3 他のガンダムシリーズの機体 (これに関しては出してほしい機体の名前を書いてください。)

4 作者オリジナル (これも参考にしてほしい機体や武器を書いてください。原型書いてから魔改造します)

以上の4択でゝす締め切りはゝそうですねゝ11月20日までにしましょうか。

23日は外せない用事があるんでそれぐらいにしまゝす。

ではまた本編でおあいしましょう・・・TPPの問題でこのサイトがおしゃかにならなかつたらですけどね(ゝ・ゝ)／~~~~

37話（前書き）

今のところのアンケートでは、

フェイトがデスサイズヘルもしくはデステイニー

アリシアがストライクフリーダム、アストレイゴールドフレーム
天ミナ、ストライクノワール、

などと言った案が多いです。中にはハルーツやサバーニャをベース
に作者オリジナルを書いてくださいなどの案もありました。

いつそのこと一番人気の多い機体をベースにして人気の機体を使っ
て魔改造しようかな・・・

37話

翌日なのは達は聖王教会に来た。

シヤツハに案内され、カリムの執務室に着き、入る。カリムとクロノがいた。

「失礼します、八神はやて陸上二佐であります。」

「高町なのは一等空尉であります。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官であります。」

「久しぶりだな、フェイト執務官。」

「クロノ提督もお久しぶりです。」

なのはとフェイトは事務的な返事をする。それを見たカリムは微笑みながらフェイトとなのはに言う。

「ふふ、二人共そう堅くならないで？ 私達は個人的にも友人だからいつも通りで平気ですよ。」

「と、騎士カリムも仰せだ。普段と同じで。」

「そうやで。」

はやてとクロノがカリムに同意する。それを聞いたのはとフェイトは言う。

「じゃあ、クロノ君久しぶり。」

「クロノ、元気だった？」

「まあ…ぼちぼちな。」

ある程度話したあと、皆で座る。そして、はやてが話し始める。

「さて、この前の動きについてのまとめと、改めて機動六課の裏表について…。それから今後の話や。」

クロノが、説明を始める。

「さて、六課設立の表向きの理由はロストログア、レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例。知ってる通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、そして僕とフェイトの母親で上官のリンディ・ハラウン総務統括官だ。それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている。」

「そしてその理由は、私の能力と関係があります。」

カリムは席を立ち、紐に結ばれ束になっていた紙を取り出す。そして、その紐を解くと、紙は光出し、カリムを囲むように浮く。

「私の能力、プロフェーティン・シュリフテン。これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成することが出来ます。二つの月の魔力がうまく揃わないと、発動することが出来ませんから、ページの作成は年に一度しか出来ません。」

「古代ベルカ語で表記してありますね。」

「はい。ですから、解釈ミスを含めれば、的中率や実用性は割とよく当たる占い程度です。あまり便利ではありませんが…。」

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの預言にはよく

目を通す。信じるかは別として、有職者の予想情報の一つとしてな。」

そこに、はやてが補足する。

「因みに、地上部隊はこの預言がお嫌いや。トップのお人が、この手のレアスキルとかがお嫌いやからな。」

「レジアス・ゲイズ中将だね。」

「そんな騎士カリムの預言能力により、数年前から少しずつ、ある事件に発展しそうな詩文が書き出されている。」

クロノはカリムのほうを見て、カリムは頷き話し出す。

「これが、預言の内容です。」

——古い結晶と無限の欲望が交わる時、死せる王の下、赤い彗星と変革者により聖地よりかの翼が蘇る。

しかしそれは始まりにすぎず、死を恐れるな、のもと、鉄の巨人と革進者が踊り、数多の海を守る法の船は脆くも碎け落ち、それを先駆けに法の塔はむなしく焼け落ちる。

そしてその後世界は新天地を求める星を渡りし者によって終焉を迎える。

しかし変革者が放つ世界と未来を照らす光により世界は救われ人々は革新と進化を遂げるであろう。

「それって…」

「まさか」

「ロストログアをきっかけに始まる管理局システムの崩壊、そして世界の終焉」

「「「・・・」」」

その場にいる全員が沈黙した。そしてクロノが話を続けた。

「この予言が、僕たち六課の後継人と三提督が六課の設立を許可した一番の理由だ。そうでもなければ上の連中が本局のエースたちを1つの部署に独り占めなんてこと認めない…だが・・・」

「情報源が不確定という理由もありますが管理局崩壊などと言うことは現状ではありえないことですから…」

「そもそも管理局崩壊後に世界が滅ぶなんて誰も信じない・・・」

「本局でも警戒態勢は引いているが上のほとんどの連中がそんなことありえないの一点張りだ。こんな対策無意味だとも言ってきている。」

「だから裏ワザを使ってでも自由に活動できる部隊がひつようやった・・・レリック事件だけでことがすめばよし。大きな事件に発展するなら最前線で部隊の推移を見守って・・・」

「本局や教会の主力投入まで前線でがんばる…と。」

「うん…それが六課の意義や。」

リボンスide

ふうんなるほど僕の介入でそんな風に予言が変わっていたのか・・・

僕は今脳量子波を使いフェイト経由して予言の内容を聞いている。

この予言にある『新天地を求める星を渡りし者』はおそらくE L Sのことだろうね・・・

まさか向こうから此処へ来るとはね

クアンタムザンライザー・・・

「粒子界領域をクアンタよりさらに拡大できるように改良開発した僕が考えた機体」

恐らくこの機体が対話の切り札になる。

「僕が…いや僕たちが望んだこの世界の変革と来たるべき対話ともうすぐ始まる・・・」

38話（前書き）

今回はこの話の最終決戦を面白くするために、ある会社と機体が出てきます。

アンケートですが現在フェイトがデスサイズヘルカスタムが一番多く
アリシアがストライクフリーダムが一番多いのでほぼこれで行こう
と思っています。

まあGNドライブ搭載しただけで出したらつまらないので色々いじ
った物を書こうと思います。

38話

リボンスide

予言を見た翌日すぐにMSの量産化とフェイトとアリシアの専用機開発を急がせた。

今のところそれ以外は順調そのものだ。管理局におかしな動きも見られない。

このままなら予定通りこの世界の変革とELS対策ができる。

・・・えっ？対話しないのかって？いやなんか金属生命体との融合って正直言って嫌ですよ。

映画も微妙な終わりだったし・・・だから対話しませんある程度戦って粒子界通信して帰ってもらう予定です。

そんなわけで今管理局のデータをモニターで見えています。

「・・・特に異常はないな・・・ん？」

データを見て一つだけ気になる物を見つけた。

「・・・最高評議会宛のメール？」

どうゆうことだ？ ジェイル以外の研究員か？ いやそれなら資料を送ればいい。ましてメールを評議会宛に送るなんて・・・しかも特にプロテクトもされていない。

「これ何か裏があるな・・・」

こうゆう物が送られる場合パターンが二つある。1つ純粋なメールそしてもう1つは・・・周りを欺くためにわざとこうしているかのどちらかだ。

「おそらく・・・後者だろうな・・・」

そう思いつつ僕はその手紙を開く。メールの中には何かの設計図と評議会宛の資料が入っていた。

「ビンゴ・・・これは・・・」

最初に資料の内容を確認した。そこには見慣れた言葉が書いてあった。

「・・・イノベイドの脳量子波数値・・・被験者・・・強化人間・・・サイコフレーム!？」

その資料には、サイコフレームを利用しクズ共が人口的に開発した、^{イノベイド}劣化品の脳量子波領域の拡大化実験のデータだった。

「バカな!なぜあいつらがサイコフレームの情報を知っている!」

サイコフレームは最近ネオ・ジオンが開発に成功したとシャアから聞いたばかりだ。その試作機としてキュベレイを開発したとも聞いた。

「・・・おそらくネオ・ジオンの開発部門に内通者が・・・ん!設計図の下に名前が・・・開発者名か?」

そこに書いてあったものはこうだった・・・

アナハイム・エレクトロニクス社

「!!!まさかじゃあこの設計図は・・・どうやら一筋尚ではいかなくなったな・・・」

そしてリボンは理解したこの設計図がなんなのかを・・・

side???

此処はとある研究施設、そこでは複数の研究員が話し合いをしていた。

「どうだアレの性能は？」

「はい。我々の予想をはるかに上回った成果を出しています。」

「そうか！実にいい知らせだ！」

「ですが・・・」

「ん？何か問題でもあるのか？」

「実は・・・被験者がGに耐えられなくほとんどが死亡しています。」

「なんだと!?!?・・・くっ!?!? 乗り手がいなければ意味がない・・・ん!」

「どうしましたか?」

「おい人造魔導士計画の一環で作った奴が二人いたろ。」

「はい強化人間のことですね。ですが再調整ができていない状態です。」

「構わん。今こいつに必要なのは、生体CPUだ。すぐに再調整してテストさせろ。」

「わかりました。」

そして会議が終了しPCの電源を落とし研究員達は部屋を出ていく。

そのPCのディスプレイの最後に映っていたのは・・・

角のついた白と黒のMSだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098w/>

魔法少女リリカルなのは 転生者による変革

2011年11月18日04時48分発行